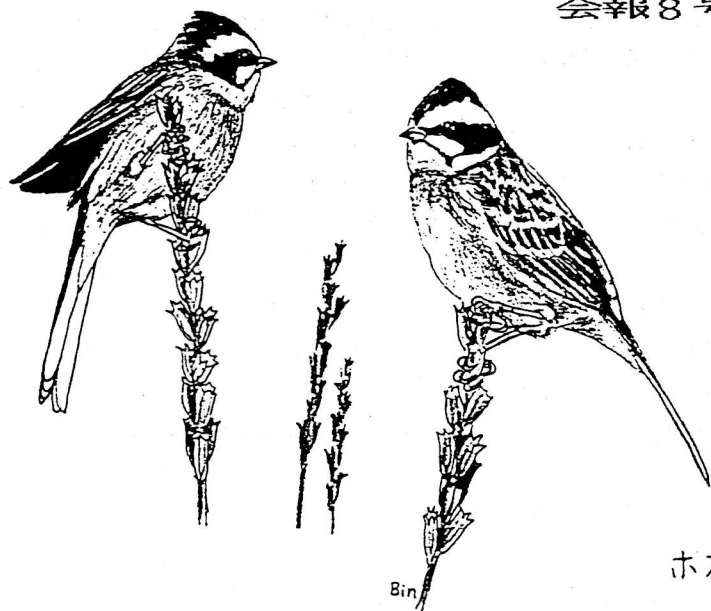


やまざと

会報8号 (97冬号)



ホオジロ

金沢大学ワンダーフォーゲル部・OB会

OB会会長の挨拶

13期 大島 良治

会員の皆様、お元気でお過ごしでしょうか。今年も残り少なくなり、早くも師走を迎えています。皆様におかれましては充実の1年であったことと思います。

来る平成10年は、ワンゲル創部40周年、そしてワンゲルOB会結成後5年目の喜ばしい節目の年であります。

私達が青春の日々を、仲間と共に野山を駆け巡り過ごせたのは、40年前の大先輩の御蔭であり、そして又、その思い出をいつまでも大切に保管して時折思い出せるのは、OB会の御蔭であります。創部当時の大先輩の方々と、OB会結成時に御尽力された会員に、心から感謝を申し上げます。また、40年間の年月、ワンゲルの灯を赤々と燃やし続けた歴代のワンゲル部員の皆様方、そして現役の部員諸君に「御苦労様」でしたと、その労をねぎらうと同時に、本当に賞賛したいと思います。

40周年を迎えるにあたり、これまでの4年間のOB会の活動を振り返っておきたい思います。

ワングルOB会が結成された当時の趣旨は「ワングル現役諸君への精神面と金銭面の援助」であったかと記憶します。

OB会結成の一因でもあった剣岳事故のような事故が皆無であったことは何よりの幸いでありました。そういった現役がOB会を必要とする場面がなかった代わりに、OBとの親睦・交流活動が、精神的・肉体的負担を強く感じさせてしまうこともあったのではと心苦しく思っております。

金銭的援助に関しては、一つにはスポーツ振興課から補助金をいただく道が開けました。しかしながら、責任・拘束感を伴い、外部の資金である点「OB会の援助」とは申せません。現役諸君の意向に応えられる「金銭的援助」については、いまだ模索状態であります。

主将の名前を覚えかけた頃には、次の主将に交代という状況の中では「現役諸君」はおれども、顔が見えないといったカラ回り感が伴いました。そういった状況下では「精神面と金銭面の援助」の趣旨は、言うは易くも行うは難しであり、具体策を立てられないままに過ぎた4年間であります。



しかし、OB会員にしましては、皆様方の絶大な協力を得まして、発足当時考えていた活動以上の事をさせていただけた様にも思います。

- 1) 現役部誌BH発行の援助
- 2) OB会報やまぎとの発行 (年2回)
- 3) 山小屋BHへの招待 (年2回)
- 4) 現役諸君との親睦会 (月見の宴)

以上の活動を皆様方に提案し、実行させていただきました。

上記の活動にあたっては、まずは事務局長の舟田さんにはたいへんご苦勞をいただきましたし、会計の鳥越君 (23期)、宛名ラベル作成の名倉君 (23期) 印刷の中川君 (23期) はじめ辰野君 (13期) 坂尻君 (15期) 北川君 (16期) 椿川君 (18期) 岡部君 (18期) 梅君 (19期) 久富君 (20期) と多くの方々の協力があったからこそと、本当に有り難く感謝しております。

来年以降のOB会活動をより充実したものにするには、役員の方々の協力もさることながら皆様方の協力、援助が何よりの基盤となります。引き続きよろしくお願い申し上げます。

来夏にはOB総会を開催の予定であります。沢山の会員のご出席をいただきまして、活発な御意見・御提案を賜り、OB会をさらに盛り上げていただきたいと思います。

予告 創部40周年総会・記念行事

* 9月12日 (土) - 13日 (日) 医王の里 (見上より徒歩20分)

キャンプ場、バンガロー、森の家など全面貸切

総会、懇親会、キャンプファイヤー、医王山ミニハイク

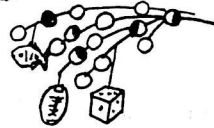
固定施設でも 120-150名宿泊可 駐車場多数有り

上記施設の申し込みは3月1日より。また地区OB会の承認をまだ得ておりませんので、予定とお心得下さい。

北陸地区OB新年会

*平成10年1月10日(土)

夜7時より



*あまつほ柿木畠店

(市役所裏 ☎076-221-8491)

*会費 7000円

金大ワングル部創部40周年の年頭にあたり、全国からのOBを迎える立場である地元OBの親睦を図りたく、新年会を催します。

40周年行事に関しての立案、ご承認をいただき、以後の準備にとりかかりますので、ご多忙のことと存じますが、何卒ご出席いただけますようお願い申し上げます。

出欠は同封の返信はがきにて、12月末までをお願いします。(新年会の出欠葉書は、北陸3県OBにのみ同封してあります。)またはE-Mailにて nagura@wnk.njk.co.jpまで。北陸3県外OBの飛入り参加ももちろん歓迎です。その場合、事務局宛(☎076-222-9288舟田)へお知らせ下さい。

OB会役員会の活動経過 とOB関係情報

(#は日時の確定していないもの)

9月2日 会報印刷の遅れにより秋の小屋酒場
案内を見込み発送

(これまでの参加者と、案内希望のあ
ったOB約50名を対象に)

9月12日 OB会報7号製本完了

13日 会報受け取り(久富)
会報発送(舟田)

19-21日 現役小屋作業

20-21日 秋の小屋酒場

旧道補修 トイレ資材切り出し

29日 スポーツ振興課に作業報告提出

29日 OB会役員会通信N028発送(舟田)

10月8日 OB会役員会通信N029発送(舟田)

17日 OB会役員と現役3年生の懇親会
(柿木畠サッポロLIONにて)

大島 辰野 舟田 椿川 岡部
鳥越

掛布 加藤 高岩 前川 山崎
小川 中野 村井)

その後、役員会。(40周年までの
段取り討議)

20日 「地図展かなざわ」にて余色立体地
図確保(?)

24日 スポーツ振興課より残金入金

26日 OB会役員会通信N030発送(舟田)

11月# 会計報告作成(鳥越)

宛名ラベル作成(名倉)

印刷(プリントショップ多田)

OBスキー合宿 i n 野沢

金大ワングル創部40周年行事第一弾！

「やってみたいね」と湧いては淡雪のように消えていたOBスキー合宿案、今年こそは「やるぞ！」

体重が増えて登るのはムム…になったOBも…

テントや食糧を運ぶのはヌヌ…になったOBも…

誰でも気楽に参加できまーす。

温泉と熱間で、うんとリフレッシュしてみたいOBに…

気のおけない仲間ととことん騒いでみたいOBに…

超お薦めの企画でーす。



＊平成10年3月21日（土・祝）

— 22日（日）

＊信州野沢温泉

・リゾートハウスふるさと

☎389-25 長野県下高井郡野沢温泉村6556

☎ 0269-85-2241 FAX 0269-85-3940



柄沢ゲレンデ前 客室／ツイン、スキーヤーズルーム 和室

44畳広間 駐車場30台 スキーレンタル、チューンナップ場

パーティーカラオケ会場 収容／120名 7500円より

・別館 自炊民宿「ブレイスポット」 中尾バス停より徒歩1分

各室 冷暖房、テレビ、炊飯器、電子レンジ、パン焼器、調味料完備

お米は自家製米購入も可 近くに食堂5、6軒あり、コンビニまで1分

無料温泉まで徒歩2分 2階はダンスカラオケ会場

クワハウス、アリーナ（温泉プール）割引券あり 13箇所の温泉は無料

☎389-25 長野県下高井郡野沢温泉村中尾

☎0269-85-3189 西方 新之助

2泊以上は1泊3000円 1泊のみ3500円

- ・リゾートハウスふるさとの方を21日泊 30名分押さえてあります。
- ・返信はがき、E-Mailで、先着30名様までOB会枠で受付ます。
以降は、直接「ふるさと」へお申し込みいただきます。その場合もご一報いただければ、OBスキー合宿のその後の案内はお届けするようにします。
- ・申し込み者にはのちほど、パンフレットや参加者名簿をお届けします。交通手段については各自で乗り合わせなどご相談下さい。
- ・自炊民宿の方は、ご家族連れや、同期会と抱き合わせのご利用、連泊に便利かと思います。

OB会名簿について

*平成10年2月、画番号が7桁になるため、今回の会報には名簿をつけておりません。
名簿担当の名倉氏(23期)がしかるべきソフトを使い、変換してくれるそうですが、
確認の為、返信をいただけますようお願いいたします。

*創部40周年をひかえ、名簿の完備を図っております。FAX、携帯電話、PHS、
E-Mailなどの通信手段を公開してもよい方は返信にご記入下さい。

ワンゲルOB会へのE-Mailは、名倉 均(23期)宛でお願いします。

nagura @wnk.njk.co.jp

*前回発送の会報7号は、以下の方が転居先不明で返送されてきております。40周年行事
の連絡もお届けできなくなりますので、転居先のわかる方はご連絡下さい。

7期 吉村 弘二	9期 谷道 正晴	11期 塚本 修吾	22期 上野 弘和
22期 青木 康治	25期 細田 晴美	26期 定田 誠	27期 坂本 久
27期 竹内 一志	27期 中橋 一彰	28期 米山 亮一	30期 紙谷 真
30期 不動 良輝	30期 山田 健治	31期 関根 道利	31期 田丸伸一郎
34期 今井 未央	34期 新保 豪一		

'97.10月末現在の変更

0902 伊藤 俊成	274 千葉県 船橋市二宮1丁目37-15-306
1601 井上 敏明	665 兵庫県宝塚市すみれヶ丘2-1-1-706 ☎0797-86-9352
1614 山上 正彦	926 石川県小松市日の出町1-45 ☎0761-20-2320 山上医院
1903 大野 政信	920-02 石川県金沢市栗崎町2-111 ☎076-237-8706
2106 大野 直子	"
2311 鈴木 康之	739 広島県東広島市西条町下三永837-4 ☎0824-26-0090
2503 石本 一鶴	359 埼玉県所沢市上新井94-12-201 ☎0429-28-2718
2910 深井 嘉浩	住所訂正 名東区ロ-名東区社口 (やしろぐち)
3001 大村 捷志	住所訂正 50号-501 号
3106 松島 佳久	842Newbury Court Schaumburg, IL60173 U.S.A

連絡先 名簿どおり

3407 金田 学	921 石川県金沢市寺町2-14-14 メゾンシェモア108 ☎076-242-6145
3602 石川 明弘	567 大阪府茨木市沢良宜西4-6-22 CSK千里丘寮207 ☎0726-37-7898
	E-Mail ameba @pc.highway.ne.jp
3607 田中 充	537 大阪府東成区深江北1-3-19 イルシオン深江橋401 ☎06-974-1323
3609 樫村美智子	921 石川県金沢市十一屋町16-24 コーポ林B23 ☎076-247-0439
38 橋本 征治	272-01 千葉県市川市入舟8-18ローズマンションA53-402

OB会会計報告

(平成9年7月1日～平成9年10月31日)

【収入の部】

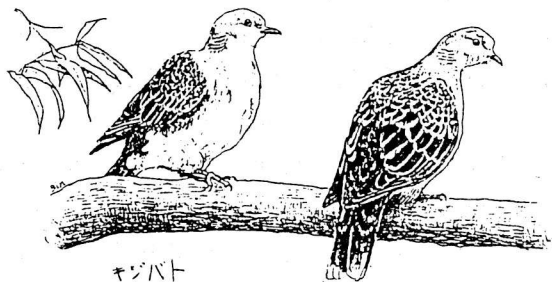
OB会費納入	110,000
ベルクハイムカンパ	27,000
預金利息	495
計	137,495

【支出の部】

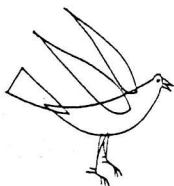
OB会報(やまざと) No.7制作費	44,084
〃 郵送料	97,650
平成9年度小屋作業援助金	50,000
春の小屋酒場食費	2,996
〃 写真代	4,572
秋の小屋酒場道具代	5,528
〃 備品代	7,602
OBと現役3年との懇親会	56,990
小屋作業案内等事務局連絡費	14,150
文具費その他	3,156
計	286,728

【差引剰余金】

前回(9.6.30現在)繰越金	1,257,544
収入の部	137,495
支出の部	286,728
差引合計	1,108,311



キジバト



*田村 昭夫 0期

山小屋酒場「月見の宴」での句会で迷句を詠む為に目下特訓中。やまざと8号には参加全員の迷句、駄句を載せて下さい。無論参加出来なかった人の句も。

*森島 稔 4期

やまざと7号('97 夏号)ありがとうございます。編集のパワーに敬服しております。楽しみにしていますので今後ともよろしく。

山には未だ近づけない程、毎日が緊張(ストレス)の中にありますが、これも半年余りでしょう。今はプール通いがせいぜいです。皆さんと共に楽しめる日を期しています。

*合津 尚 3期

月のうち半分を釜石市で仕事をしている関係で、9月15日に久しぶりに山(早池峰山、薬師岳)に登りました。2000m弱の高さがありますが、一日で消化できたということで、体力に自信ができました。

*篠島 益夫 8期

今日は広島時代から一年振りの山歩き。岡山郊外の熊山へ登り下り4時間、久しぶりに良い汗をかく事が出来た。頂上はやって、備讃瀬戸の展望はなかったが、奈良朝の熊山遺跡には巡り合った。

ワングル時代の見上山荘から医王山トレを思い出しながら、よく似た山道だった。

*平村 耕作 9期

やまざとありがとうございます。楽しく読ませていただきました。秋の小屋酒場、是非行きたいと思っていたのに今回行けなくて残念です。次の機会に心身共に鍛え直して参加します。

なお、今年の初め「部誌ベルクハイム資金カンパ」の話がありました。当方なんかやて出していなかったと思います。少しでも同封し

ます。もし締切で受け付けなければ、山小屋リフレッシュへのカンパなど、お任せします。今後ともよろしくお願いします。皆さんによりしくお伝え下さい。

*吉田 幸造 9期

今度の休みも休日研修で、年配者に厳しくなる今日この頃です。

先日同じ部署の若者と話をしたら子供の頃全国を転々と、父親の最後の仕事はスーパー林道で、今時々つれていくことがあるとのことでした。意外と身近に話をしたい人がいるものだと思います。

私の息子も徳島大学ワンダーフォーゲル部へ行っているようです。山で会ったら又かわいがってやって下さい。

私は山へは行けませんが、森林ボランティアに時々参加、木と土のにおいに親しんでいます。山小屋酒場が繁盛するのを祈ります。

*守内 成一 11期

何時も連絡ありがとうございます。残念ながら小屋酒場は不参加です。

*長岡 正利 11期

この秋、金沢で地図展があります。よろしかったらご覧下さい。いろいろ盛り沢山、詰め込みすぎの展示ですが、新建設大臣所蔵の地図も1点あります。

*松林 知一 15期

「やまざと」拝受。いつもありがとうございます。さて今夏は「山復帰宣言」を実践に移すべく、伊吹山に始まって(頂上まで完歩)剣岳(馬場島まで)三ノ峰(石徹白大杉まで)とわけ入ってきました。

そして本日は決意も新たにコージツ高尾店へ行き、18000 円の高アテックスシューズを買ってきました。北アの稜線へデビューする日も近い?自分を奮めてやりたいと思います。

*舟田 節子 15期

帰宅するなりワッと泣き伏す三男坊…。聞けば昨年来入りがっていたサッカークラブに親友のK君も入団することになり、「K君まで入ってしまう。遊ぶ子がなくなる。僕だって入りたいのに!」

親まで拘束される今時のスポーツクラブ。「山行の敵!」と排除してきたものの…子供には子供の人生。よくぞこれまでオジンオバンに付き合って登ってきた!今度は親が我慢してやることにしました。ホント、出番のない息子の応援に一日潰される身って我慢も我慢です。日差しと埃を浴びてお肌の方もあいかわらずの酷使です。

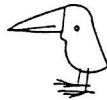
でもねえ…シュートが決まった時の笑顔、涙をうかべた赤味のさした顔、それが友達と遊んでいるうちにはころんでいく…ジワッとくるシーンがいくつもあってねえ。舞台は山に限るわけではない、燃焼したといえる時間に浸ってほしいと、どの子にも思います。

*清水 重仁 16期

毎度ご案内ありがとうございます。今回は現役も交えての酒場(作業)ということで楽しくなるでしょう。しかしながら当方は子供の運動会と重なってしまい、残念ですが参加できません。特に常連の方々にはよろしくお伝え下さい。

赤布の件ですが、元々は私の独言から発したと思いますが、実行の運びに至ったことは、皆様のご賛同を得たものと判断させていただきます。なお実施については今回不参加という事情もあり、関係者に一任しますのでよろしくお願いします。

(お約束通り小屋酒場の時に「白山-BHPW」の赤布をはずし、しみだらけのまま高村夫人にお送りしました。どの程度に復元をと?困惑されたようですが、現物よりもっときれいな字のものが、来春もとの場所に収まる予定です。)



*渡辺 和文 17期

小屋酒場の盛況喜ばしい限りです。今夏、家族で湯涌温泉に一泊。犀川ダムにも20数年ぶりに行きました。駒帰から先は舗装されていたものの、現役の頃の風景を思い出させてくれました。しかしよくあの長い道を歩いたものだと思います。ダムから小屋まで2Pかかりましたよね。下宿(馬場小前、工学部前)、角間キャンパスにも行ってきました。

*椿川 利弘 18期

今回は、町内会、小学校の役員をされていてろんな行事があり、田んぼの方も重なってどうしても出られません。すみません。

*榎 典雅 19期

今年の夏は最悪。梅雨明けから1ヶ月の入院。しかも、その後半年間は安静とかで、当分の間山にも行けず、おとなしくしていなければならない状況。

*久富 象二 20期

いつも事務局のお仕事御苦勞様です。お役に立てず恐縮しております。

さて17日の件(現役3年生との懇親会と役員会)ですが、折悪く16、17日と熱海へ出張がありまして、17日の掃りが遅くなりそうなので、欠席とさせていただきます。懇親会後の役員会の内容については後日お聞かせ願えればと思います。

諸準備大変のこと、心苦しくはありますが、お集まりの諸兄でよろしくお進めいただければと思います。何卒よろしく。

(岡部さんがねえ。この間のマラソン、象さんに負けたと悔しがってましたよ。あいつも相当走り込んでるねって。そお。姉さんは高三郎をバックの象さんだってかっこいいだろうと思うんだけど…。)

*鈴木 康之 23期

住所が変わりました。

*石本 一鶴 25期

9/26-10/5はフィリピン出張。

10/10-3/27はインド出張の予定です。

80kg超のデブになり、この頃はエスカレーターも遠慮して歩いています…。海外生活では運動量が落ちてしまいます。そしてさらなるデブへと…。

*益川 珠美代 26期

やまざとNO拝受いたしました。いつもいつもありがとうございます。小学校1年生を担当していて、会話も思考も「ひらがな」の毎日です。「拝受」は国語辞典でひいたばかりなので、大丈夫！です。

*土井 泰彦 28期

今年の4月に住所が変わったことをそちらにお知らせしました。やまざとの中にも変更が記されていましたが、やまざと自体が旧住所に送られていました。よろしくお願いします。

(お心遣いをいただきましたのに、チェックがいき届かずすみませんでした。懲りずにご連絡をお願いします。)

*松島 佳久 31期

渡米中ですので、払込用紙もう一度旧住所に送って下さい。(佳寿代筆)

*奥出 俊一 33期

気象予報士の資格を取りました。そこで「もうくお天気乞い」は昔のこと。雨男？怖くないもんね」

と思いがあっていたら痛い目に遭いました。

10月に同期3人で出掛けた裏剣はアラレが雪に変わり、烈風吹きすさぶ剣沢の酷寒テントで

はまんじりともできず、この荒れ方はきっと、ワンゲル界の雨男・雨女達の逆鱗に触れたに違いないと、本気で反省しつつ夜明けを待ちました。

*金田 学 34期

今年の4月から住所が変わりました。

*樫村 美智子 36期

いつも御苦労様です。春に住所変更をお知らせしたつもりでいたら、どうやら勘違いだったようですみません。学生時代と大して変わらない場所です。(下記に示します。)何かお手伝いできることがあったらご連絡下さい。

*田中 充 36期

結婚しました。住所は下記のとおり変更になりました。小屋へはまた行きたいのですが、行けそうにありません。

*橋本 征治 38期

大学を卒業して社会人となりました。だが、何を血迷ったのか会社の登山サークルに入ってしまったようです。半年に1回くらいしか山には行けませんが、これから続けていこうと思います。

*石川 明弘 36期

裏面のとおりに引越をしました。大阪の雰囲気の方が私には合っているような気がします。次回の配布物はこちらへお願いします。それではまた。

PSそろそろプロバイダ(日本海ネット)と契約なさってはいませんか？

(そろそろE-Mail addressをもたれては？我々36期は半数以上持っています。舟田さんともあろう方が…。結構通信手段としてのコストは安いです。)

(ご親切にありがとうございます。この事務局長職を退けば、ものにする時間が出てくるかも…。はや



けど、まず差出人の名前を書きなさいつうの！)

*松尾 秀邦様 元顧問
(愁心碑の説明文揮毫依頼へのお返事)

前略。電話でもご連絡頂き、早速拝見致しました。とにかく悪筆につき御勘弁御願ひ致したいと思います。

同封の「石川県の山」有り難く懐かしく拝読致しております。

また、同封の写真<愁心碑補修完成時に写したもの>、顔に覚えの人々がありますが、上馬君以外の方々の名前が出てきません。紅一点は貴女と思いますが、<それは訓子さんです。> 10月11日兼六荘に留まり、12日は白峰に入ります。今度は19日まで。(途中16-17日は富山)

<松尾先生は現在松山市にお住まいですが、文面からすると、石川県へはよくお越しになっている様子です。>



秋の小屋酒場

9月20日 午前6時 犀川ダム発
田村 (3期) 奥名 (15期) 舟田 (15期)
(登山道修復…田村、舟田)
(日帰り…奥名)
分岐一頂上の中間地点までを整備

午後3時 犀川ダム発
辰野 (13期) 吉田 (13期) 松林 (15期)
9月21日
トイレ築造資材切り出し 小屋仕舞い

お釜のはなし---

秋の小屋酒場のキャッチフレーズは…釜炊き栗飯を食べよう！でありました。ところが…

まず、かつて小屋にあったお釜ばというと、それが…お釜の宿命で底が抜けましてね…それは教祖様が何ともいえないリサイクルをなさいました。そう、例の洋式便所の台座としてご利用あそばされたのでございます。お釜の縁にはU字型便座が据えつけてございました。ハア私はかつてお米を炊いたものを跨ぐなど、いかにリサイクルといえどもいたしかねて使用してはおりません、ハイ。

ともあれせっかく竈が補修されたことでもあり、お釜にこだわって探したんでございます。それが本当になくて、やっと横安江町のカナモノ屋というたずまいの所で見つけたんです。が、それは一番小さいサイズで、あとはカタログで取り寄せなければと言われました。おまけに本体が1万円以上。木蓋は別売りで、本体より高い とのこと…。1年に1度使うか使わないかのものに2万円…。いかにOB会計からとはいえ…で、あきらめたんでございます。酒場の当日はお鍋で、しかも現役の皆さんとも分けましたから、栗(市販のむき栗)はあったかないかの栗飯でございました。

よって「釜炊き栗飯を食べよう！」のテーマはいまだ達成をみておりません。どこかのお宅に忘れられたお釜がきっとあると存じます。使って道具としての命を全うさせてあげるのも功德ではないでしょうか。

BHへのご寄付を呼び掛けるものでございます。
(舟田 節子)

楽しい楽しい

「山小屋酒場」へのお誘い

(まだ一度も参加していない人のために)

15期 松林 知一



なお、次回春の小屋酒場は5月23日(土) - 24日(日)です。

ホンシャクナゲのきれいな時。

旧道から頂上までの整備がいよいよ完遂。

感激のテープカットができるかも？

先の話ではありますが、ちょっとでも参加希望がありましたら、返信該当欄に○を。

集合時刻の案内などは、希望者にもみ発送されます。

うっかり、飛入り参加は事務局へ直接お問い合わせ下さい。

山小屋酒場は残念ながら年に二度しか開きません。ですから、一度チャンスをのがすと半年は無念さをかみしめることになります。そうならないためには、万難を排して開店日のスケジュールを空けておく必要があります。仕事や家庭サービスがどんなに忙しくても山小屋酒場での貴重な時間には代えられないのですから。

では、山小屋酒場に顔を出すと、どんないいことがあるのでしょうか？

- ①ふだんは雲の上におられる“教祖さま”のご尊顔を拝することができる
- ②ふだんは奥の院におられる“政所さま”の手料理を味わうことができる
- ③ふだんは口も聞いてもらえない“ピチピチギャル”とも親しくなれる
- ④ふだんは動かすことのない筋肉のさび落としができる
- ⑤ふだんは味わえない、きれいな空気とおいしい水をたっぷりと吸収できる
- ⑥ふだんは眠っている脳の活性化ができる
- ⑦ふだんはできないウォーキングが楽しめる
- ⑧ふだんは考えもしない人生の深遠について思いを巡らすことができる
- ⑨ふだんは耳にすることもない鳥の声と川のせせらぎが子守歌になる
- ⑩そして、なにより酒がうまい

こんなにいいことばかりなのに、何と、会費はただなのです！ つまり、ただで酒が飲めるのです。このせちがらい世の中に、ただで酒が飲める場所がほかにあるでしょうか。

ですから、これまで一度も山小屋酒場へ来たことのない人は、せめて一度は顔を出しておくべきです。死んでも死に切れませんよ。

今度の開店日には、いよいよトイレが立ち上がります。めでたい建ち前ですから、当然お酒も大盤振る舞いされることでしょう。でも、せっかくのお酒が残ってはもったいないと思いませんか。召集令状が届いたら、何はさておいても駆けつけてください。

新しい顔にお目にかかれるのを楽しみにしています。

(了)

97年山小屋酒場報告 及び雑感

13期 辰野 隆義

今年は天候不順である。夏のまっ盛りに台風がいくつもやってきたり、秋晴れの時節に雨が続いたり…どうも嫌な日が続く。

9月上旬のある日、突如電話が入った。もちろん舟田さん。

「9月20日に小屋作業が決まりました。段取りをお願いします。」

とのこと。去年は10月中旬に実施した記憶のあった私は、そろそろ準備しなければ…とは思っていたものの、急な勧告を言い渡され、一瞬目が点になってしまった。あと2週間もないではないか。それに今回は便所を造るという大仕事の予定である。

電話は切ったものの、急に心が重くなってしまった。最近出張が多く、仕事その他で頭の中はほぼ満杯状態である。でも自分が言い出して始めたことである。何とかしなければ…。

(またしても編者注；辰野さんには、山中での施工の段取りというとてもない仕事をお引き受けいただいているうえに、必ずその報告記事を書かされるというワンゲルOB一の災難を被っていたいております。

それゆえ事務局の心痛も並々ならず、いつ段取りをお願いすべきか…早すぎる宣告もお気の毒、さりとて慌てなければならぬ事態も避けねば…。と苦慮したところで、現場監督なしで始められるものでなし、真先に辰野さんのご都合をお伺いしている次第です。ですから少なくとも、OB会報原稿をそろえていた8月上旬にはお知らせ済みでした…。

というわけで、ご記憶の件はそのお…ずれておりまして、その日は「遺憾ながらOB会報の印刷がまだ為されておらず、ハガキで急遽別案内を出すにしても、この段取りではOB参加者はほとんど望めないであろう」との連絡でした。

もちろん、勘違いされたにしても、それは重責をいくつもお抱えになっているせいと、重々承知しております。

億単位のプロジェクを担っている方に、こんなことをさせていいのか?!の自責の念にかられる私としましては、「小屋酒場の酒がどこよりうまい」「さあ、来春は…」のお言葉が何よりの救いなのでございます。ハイ。)

結局出張先の東京事務所で、仕事をしているふりをしながら便所のスケッチを書き、必要な部材、調達方法等を考える。その結果、これは道具・技術を持たない我々にはかなりの大仕事だということが判った。それに、大物の材料は現地調達となり、測量の技術もない我々は現地合わせて、臨機応変にやるしかないとの結論に達した。それと同時に、今回の作業では全てを完成させることは到底無理で、来春、またはその次までの継続作業になるだろうとの予測も立った。こうなればかえって気楽である。この会の基本理念通り、「無理せず、楽しく、迷惑かけず」の精神でやっていけばいいのだ。

1週間程してから舟田さんに電話を入れる。やはり参加希望の連絡がほとんどなく、5、6人のあたりかとの返事だった。それもよし。モットー通り、無理せずやれる所まででよいのだ。

大島君と連絡をとる。作業の相談と材料調達の為だ。今回彼は作業に参加できないが、材料調達を引き受けてくれた。

18日(木) 現場の帰りに一人でホームセンターへ買い出しに行く。

19日(金) 夜、大島君と待ち合わせ。借りてきてくれたチェーンソーを受け取る。

21日(土)

出発の日。先発隊は早朝から入っている。今頃高三郎を登っていることだろう。「小屋作業隊」といっても、私と15期松林君の2人のことだが、ダムで待ち合わせる。荷物はチェーンソ

ーに、栈木にする為の角材、その他。2人ではちょっとしんどいかな？と思いながらも力を合わせて、おしゃべりしながら山小屋まで4ピッチ。

山小屋の下の河原では15期奥名君がうろついていた。私達があまりにも遅いので、もう帰ろうかと思って下りてきたらしい。再度彼も小屋へ上がって休憩。春には出ていたはずの水が出ていない。早速奥名君と取水箇所へ行ってみると、ステンレス籠が砂で埋まってしまっていた。ドライバーでビスを外し、籠の中の砂をエンビはじくりだす。結構疲れる作業であったが、甲斐あって水場には豊富な水が出るようになった。即、ビールを冷やす。ここで奥名君はまたの再会を約して下山。

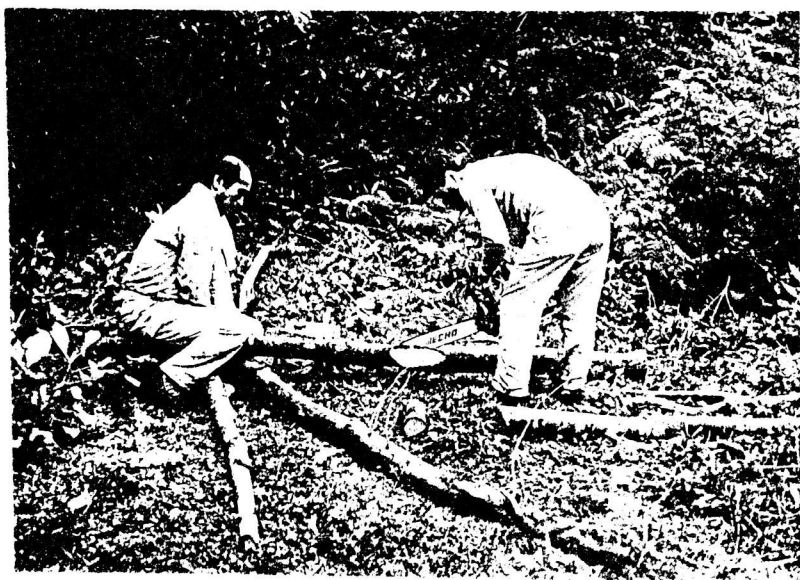
いれかわるように13期の吉田君が顔を現す。休憩し、ビール1本の後、明日にむけ、なるべく真っ直ぐに伸びた木を探しに出発。小屋の裏のブッシュへ踏み込む。久し振りのブッシュ漕ぎである。体にパチパチ当たる小枝が心地よいと思えたのは最初だけ。そして、斜面に生えている木というものは、どれも幹が曲がっていることも痛感する。それでもどうにか最初の気力を維持し、やっと5、6本の 木に目印の紐を結びつけ、ぐったりしてブッシュから逃げ出す。この分だと明日は木を切り出して終わりかもしれない。

高三郎に登っている連中はやけに遅い。仕方がないのでカマドに火でも起こして待つことにする。しかし街の人になってしまった悲しさ！火がなかなかおこせない。

そこへようやく高三郎から、現役と田村・舟田OBが帰還する。しばし再会を祝し、食当は現役に任せる。

夜の宴は他の人が書いてくれると思うので、省略するが、一つだけ言っておきたい。何故現役が奥の方でワイワイやり、OBの方は入口でひっそりやっていたいなければならないのか？大人気ないのでその場では言わなかったが、私の年代からすれば考えられないことである。（私は古いのでしょうか？）別にOB風を吹かせたいとは思わないし、昔の話をくどくど現役に話したいとも思わない。彼等には彼等のワングルの関わり方があり、青春を謳歌すればよい。が、OBを下座において歓談してられるような神経を私は持っていなかったし、あの頃の現役は皆そんな気遣いができていた…そんなギャップをぐっと飲み込んで、にこにこ笑顔を作っていました。

一夜明けて21日。昨日は久々に一日中青空できれいな星空も拝め、今日ももってくれそう。朝食後、現役達は下山。残ったのは総勢5名のOB。とてもアッホームなのんびりした気分で





ある。

私が求めていたのは、まさにこれであった。毎日忙しく飛び回り、いつも頭の中は仕事の段取りやイライラで埋め尽くされ、溜まりに溜まったストレス。その忙しい中をやりくりして、山小屋酒場の段取りをし、疲れた体にムチ打ってベルクハイムにたどりつく。苦勞した割には参加者も少なく、他人から見れば報われない、馬鹿げた思い入れとも映るであろう。しかし、街でいくら金をかけて楽しもうと、この一時に勝るものはない。一日布団に潜り込んでいてもとれない、そんな類の疲れがすっと抜けて、心の底からリラックスできる。これぞ本当のリフレッシュ。参加できないOB達は残念ですね…が私の本音である。

さて本日の作業は木の切り出し。男3人はブッシュに潜り、チェーンソーで目的の木を切り倒し、枝を払い、予定の長さに切断したうえで、ブッシュの中を小屋まで引きずりおろす作業を行う。なかなかの重労働である。昨日のような小枝のパチパチが気持ちがいいどころではなく、しゃにむに小屋めがけまっしぐらである。それだけに切り出し後の快感は言葉にならないものがあつた。そのまま地べたに座ってしばらく休憩。さっとコーヒープレイクが運ばれ、煙草も何ともいえないうまさ。そういえば昔は小屋での麻雀中に煙草が切れ、わざわざ駒帰まで煙草の買い出しに往復した奴もいたな…。

あとは木造りである。どうやって柱や梁を持たせるかを現場を見ながら相談し、寸法を合わせて切断していく。「この木をこう切って、こ

こに打ちつけよう」で、パタパタパタ、ギューンと切っていく。チェーンソーを扱うのは吉田君（通称ホヅミ）。実にうまいものだ。ところが、ギューン…ギューン…パタ…？止まってしまった。スタートの紐を力一杯引くが、パタパタパタ…だけで動かない。コックをひねって覗いてみると、燃料切れだった。実に順調に行っていたのに…急に体が重くなってしまった。誰言うともなしに「今回の作業はここまで」となり、切り出した木を小屋の脇に積み、以下来春とする。

舟田女史が仕込んでいた昼食も頃合よく並べられていた。昨晚と今朝の腹に収めるだけの食事に比べれば、さすがのもので、ふっかり炊けたご飯に、ウナギの蓮蒸し、カニ真蒸のおつゆ他、が並び、これまで山では食べたこともない豪華メニューであった。存分に働いた後の心尽くしの手料理…実に満足な秋の小屋作業のフィナーレであった。

今回の山小屋酒場は参加OBも少なく、こじんまりしたものでした。でもそれはそれでよいと私は思います。「無理せず、楽しく、迷惑かけず」をモットーに、参加できる人が、心のリフレッシュを求めてベルクハイムに集うことが目的だからです。強制されて参加すべきものではないし、都合がつかなければそれも仕方ないし、昔に少しでも帰って「我、とこしえに緑なり」が実感できれば、それで良いのだと思うからです。

さあ来春の酒場の日までまた頑張ろう。

全体として受けるイメージは20年前と変わってはいない。

もちろん、枝や葉が生い茂って道とは思えなくなったダムから先の道、見晴らしのよかった筈の湖に突き出た休憩所、言われなければそれとは気付けないガレ場、跡形もなくなった倉谷の廃屋——一つ一つをとってみれば、みんな変わってしまった。そして私自身も変わってしまったけれど、こうして小屋に一人ぼつねんと座っていると、何もかもが以前と同じような気もした。

見上げると山々に画された狭い空。昨日までの雨で、辿り着くまでにずぶ濡れになってしまったが、その雨の御蔭で空気も澄んで、空の青さも一段と増している。時折真っ白な雲が行き過ぎる。絵本のような空にはかえって不自然ささえ感じてしまう。

頭から足の先まで水に浸かったように濡れてしまった。着替えた物を、わずかに夏の名残を含んだ日差しで暖まった、小屋の礎ともいえるまわりの石に、張り付けて乾かした。生まれて間もないトカゲが何匹もその石の上を這い回っている。丁度心地よい暖かさなのだろう。

少し離れて「愁心の碑」。かつて、上の方が太く、猫背気味になった高さ1m程の柱に嵌められていたこの碑は、今はコンクリート製になり、落書きさえある。双六小屋のトイレに落書きしてひどく叱られたことを思い出す。

この碑の前には、何の為なのか、ドラム缶の上部10cmを切り取ったものが置いてある。時々乾かし物を見に行くと、決まってそこに1m程の黒っぽい蛇が昼寝をしていて、その都度茂みの方に仕方なく移動する。とても逃げて行くといった様子ではなく、ドラム缶の下でもを寝ぐらにしているのだろう。

しばらく小屋の中で横になって休んでいても、物音や鳴き声は聞こえない。時折聞こえてくるのは、迷い込んできた蜂の羽音と、窓ガラスに

ぶつかる音くらい。少し寂しくてラジオをつけてはみたがすぐに消す。こんなにもゆっくり時間が流れることもあることを、改めて思う。だからといって、退屈というのでもない。

普段の生活では、あまりに物が身近な所にあるすぎるのだろう。冷蔵庫をあければ食べ物や飲物、リモコンのボタンを押せばテレビやステレオ、ちょっと手を伸ばせば雑誌や本。何やかにやと時は流れ去っていく。

疲れのため、しばらく眠る。

そういえば水場の整備を頼まれていたのだった。靴はまだ乾いていない。サンダルで行く訳にもいかず、土間を見渡すと、地下足袋が1足。丁度26cm。田村さんよろしくこいつを履いて、鎌を片手に取水口への道を辿る。替えのズボンが薄手の生地で、刺のある枝があたると痛くてたまらない。最初のバルブ地点はすぐ近くの、そこまででえらい目にあってしまった。案の定バルブを開いてもチョロッと水は出ない。

そこから先はブッシュが生い茂って、中には背丈程もあるイバラのなれのはてまであり、しばらくは枝払いに専念する。第2バルブは開けると勢よく水が飛び出してきたので、ここまでは水が来ているのかと思ったが、みるみるその勢いが衰えて止まってしまった。たまっていた水が出てきただけだった。沢筋に出た所に第3のバルブがあり、そこはあけても1滴の水も出なかった。やはり取水口でつまっているようだ。

沢を少し上がった所に取水口があり、周りを石で固定してある。とはいえここまで来たのは初めてで、水の取水構造がどうなっているのかはもちろん知らない。金網の上には落葉が溜まっており、とりあえずそれを取り除いたが、それだけで水が出るようになるとは思えない。金網のすぐ下は砂地になっている（この下に本体があると、後でわかった）。その金網はビスでしっかり留まっていて、鎌しか持っていないので開けることもできない。ホースの先は石の下

をくぐってどうなっているのかそれもわからない。

あとから辰野さんも来ることだから、それからにしようと小屋へ戻った。ところが午後に来るという辰野さんと松林は、待てど暮らせどやってこない。明日は所用があり、4時前にはここを出発したい。「早めにおりて来よう」などと言っていた田村さんも舟田さんも帰ってこない。水場が直っていないのが心残りだったが、3時も過ぎてしまったので、周りを片づけて小屋を下りた。

丁度下の道に出た所で、のんびり二人がやって来るではないか！しかたなく(?)小屋に戻りとりあえず水を確保するために、辰野さんと取水口へ向かった。そこで初めて構造を知る所となった。金網を外して中の砂を掻き出す。あまりの多さに、途中で支えている足がつりそうになる。底の方は粘土質の砂になっていて、結構力のいる仕事となった。ホースの先の部分をきれいに砂から出して、そこへ手をやると吸い込まれてちぎれそうなくらい水が流れていく。これで舟田さんには蔑まれずにすむことになったが、辰野さんにはいつまでたっても頭が上らない。

という次第で他力ながら責任を果たし、ホースから流れ出る水で冷やしたビールを1本飲んで小屋酒場を後にした。下の道に出た所で、今度は穂積さんに出会ってしまった。でももう戻る訳にはいかない。これ以上遅くなっては明るいうちにダムまで帰れなくなってしまう。さすがに暗くなっては一人では帰れない。

倉谷自体の雰囲気はほとんど変わっていないように、穂積さんも全体からしみ出てくる雰囲気は昔のままで、一目で誰だかわかってしまう。

ここに来ると、みんな昔に戻ってしまうのかもしれない。



連絡が出遅れたこともあり、また技術系は第3土曜は休みではない。結局参加者は上記の6名になった。ニューフェイスは同期の奥名さんくらいで、翌早朝会社の慰安旅行に出る為日帰りという彼には、早立組に加わってもらった。

田村教祖様は、常宿の天神橋詰め休憩舎でお泊まりだった(既にそこで信者を増やしておいでる模様)。教祖様は来沢ついでにまず御息女をお訪ねになるも、彼女の夜勤とぶつかり、前夜も新潟駅で野宿されたとのことだった。

現役達は昨日入山し、今日は倉谷を6時発で作業し、明日は帰るだけの予定。昨日は午前中が雨。予定どおりに出立しているか?と少々気にしていた所、昼1時に

「ダムより奥で1箇所崖崩れがありますが、現役は予定どおり倉谷に入りました」

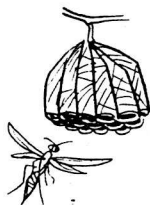
との電話を3年の小川さんからもらった。連絡を感謝したもの、どういう背景でそんな情報が入ってきたのか?よくわからない。幸い今日は好天に恵まれそう。露払いの奥名さんはすぐぐしょ濡れになった。

出島の手前にザックが3個転がっていた。崖の下にでもと見回すも誰もおらず、何のことかわからない。(あとで判明。昨日ここで女子が一人落ちて脚をねじり、総計3人が引き返し、2人が翌日の今日入山することになっていた。引き返したうちの小川嬢がついでに崖崩れの連絡をいれてきていたのだ。) 出島からは例年どおり草薙がしてあり楽になる。

小屋上がる。ありゃ水が出ていない。散々気にしていた蜂の巣は小屋の内部には痕跡もなかった。よかったよかった。

(初夏の小屋酒場の帰りに、何であんな所にナットが?と思ったのがスズメバチの巣の台座だった。上馬さんに電話で聞くと、スズメバチは初夏から巣を作り始め、一夏で大きくしてしま

う。まだ営巣しているなら厄介…とのことだった。あれから現役も小屋には入っていないそうで、小屋に泊まれないかとの連絡もしていたのだった。



この報告を帰ってから、また彼に入れたら、彼もホッとしながら、巣作りは中断されることも多く、もともと有機物の為、他の生物に食べられたり、菌類に分解されて消失することもあると教えてくれた。また少し賢くなれた。）

ざっと現役のザックを数える…11個。高岩チーフの話では17名参加だったが…。電話で「17人！」と思わず絶句した私に、彼は申し訳なさそうな声で「皆、都合が悪いとか、用事があるとか言って…」とつけ加えた。チーフが苦労するだけで、個々の部員は30万円が入るといっても義務も責任も感じてくれないのだろうか。

（昔は、秋休みはPWと小屋作業がセットになっていて、前半、後半のどちらかは小屋作業に出ることになっていました。その種の苦労は余りなかったのではないかと思います。

それに何より皆が山小屋が好きで、留年した、失恋したの麻雀だのと、いつも誰かが小屋に行っていました。部室から、白鳥路に下りて交差点を渡れば、駒帰へのバス停があり、部室から小屋までは一筋に道がつながっているような感覚もありました。思い出は星の数ほど…そう一年コンパを山小屋でやろうとなって、早々に留年を決めた細田君が肉を抱えて先発。その後集中豪雨になって本隊の入山が一日遅れ、もしや犀川ダムの藻屑にでも…と心配した私達を、彼は30人分の牛肉を一人占めした艶やかな顔で出迎えてくれたのでした。肉なしのすきやきを私達は嬉し涙にくれて食べ…。食べ物の恨みは怖いから、まだ覚えてるわ！）

であれば、わざわざ参加した部員の方は誉めて

あげなければならない。

奥名さんには水場整備を任せ、田村教祖様と高三郎へ向かう。彼は「現役を並べて拝調するんだ」と笑い、私は遠々会津からこんな所まで駆けつけてくれるような方が、創部者であることに感激していた。一度ならず、毎回…。真似のできることはない。私達の元気の素の田村教祖様がずっとお元気で君臨されることを、祈らずにはいられない。こどもやりましたね、あそこも…で登って行くのは楽しく、春に張ったロープもぐいと握ると思わず笑みがこぼれるのだった。

BHの出立時間差が2時間半。であれば、現役は分岐あたりに取り付いているだろうか？ところが登り口から2時間の所で私達は現役に追いついてしまった。昨秋の終了地点どころか、前高のなだらかになりかかる所だった。

彼等は昼食が終わった所と言い、半数が慌てて立ち上がって行った。ともかく「ご苦労様」と声をかけ、3つの転がっていたザックの謎も解け、彼等の方にも現役の本日参加部隊が未到着であることがわかった。

息を整えつつも私の顔は引きつっていたに違いない。昨秋は台風がかすめ、風雨についての作業だった。こんな晴天に恵まれた日に、昨年よりちょいと進んだだけで、30万円いただきなんてどうしてできる？小屋酒場の日を決める時、辰野さんは迷惑かけずの趣旨どおり現役の作業日にこだわらなくても…だったのだが、私は40周年が控えていることや、複数の人間がいる方が臨機応変の対応が可能になることや、何より30万円を請け負った人間として現場を確認しなければの責任で、今年も同一日の線でまとめてしまったのだ。やっぱり…現実は一。

落胆を押さええて彼等の作業を見ていると、ラッセルと同じことをやっているのだった。先頭が作業にかかると後ろは皆つつ立って待っている。せいぜい手の届く範囲の小枝をひょいと払うだけで、ぼんやり待っているのだった。こんな手順ならここまでしか進まないはずだ。

埒が明かない。私達は「お先に」と彼等を追い越し、昨秋の終了地点から始めることにした。おぼしきあたりに到着し、足を止めると同時に私の口の方は、ボロのチョンの文句で止まらなくなり、田村さんの方は静かに頷かれて「OBでやるしかないなあ」とのたまわれた。さすが教祖様。教祖様には、ワンゲルの門を叩いた小羊は全てが可愛いのだ。非難すべきは彼等個人ではなく、もっと背後に横たわるものなのだ。収まらない腹の方は昼食で塞ぎ、鋸を手にして伐開を始める。「今年はこちらをやりました」と胸を張って報告できるのは、ここから後…アドレナリンもエネルギーも充填された勢いで猛然と刈り進む。

足場が悪くなったと思うと、分岐下のガレ場に来ていた。時節柄、高茎草原にうっそうと覆われ、幼木が育ち始めていた。このガレ場をどうするか懸案だったのだが、この分ならそこそこ土が落ちていくことだろう。ガレ場の最上部の5mばかりは右に迂回路ができていた。はっきり迂回路とわかるよう刈り明けておく。そこからすぐが分岐だった。赤布が2本下がり、新道側はさすがに藪が濃いようだった。ザックを置いて写真を撮り、伐開をすませてからザックまで戻り、同じアングルにして写真を撮る。この比較写真が、スポーツ振興課への報告写真となる。



ここからは高三郎でなければ撤退したいような藪。ぎっしり小枝を伸ばしたのや、茂った笹が道の痕跡になだれかかっている。伐開スピードがガクンと落ちる。

ようやく現役達が追いついてきた。彼等も伐開の要領が判ってきたらしい。間隔をあけて各自が体を動かすようになってきた。さっきは迷惑気なよそよそしい顔だったのが、同じ汗を流す仲間の顔付きになった。先輩のやり方を見よう見真似で覚えていくことが、途絶えてしまっているのだから、勝手にカッカとなっているのもおかしいのだ。今回は仕事の都合がつかなかった椿川さんや、岡部さん。やっぱりあなた達のような壮年OBが、戦力としてもお手本としても必要だわ。私の前で休憩した6人は皆1年生で、新トレの高三郎が辛かったこと、それでも登れた後は嬉しかったし、高三郎が登れたらどんな山だって登れると聞いて自信がついた…と昔と同じように話していた。だから私もとっつきは腹の立つこともあるのだけれど、やはり現役は可愛い、やっぱりやれることはやってあげよう、それが先に生まれたものの務めなのだと思います。

3時近くになり、彼等は帰り支度を始めた。私は「田村さんが先行しており、彼と合流でき次第引き返すから」と前川君に言って、頂上を目指す。そこからは、5-60cm中の踏跡が判別で



きるものの、藪を掻き分けて進む状態だった。大岩の段差にはロープが張っており（帰路の時ここにも右に迂回路があるのか判った）、20分で頂上だった。田村さんとはその手前で出会い、彼も再度頂上に戻られた。頂上は三角点の周囲直径3mばかりか刈り開けてあるだけで、すす竹の壁。展望も何もない。「金沢大学ワンダーフォーゲル部」の案内板を支え持ち、田村さんと交代で記念写真。そう、ここは金大ワンゲルの名が一番誇らしい場所。思い入れのある山を持てる人は幸せだ。たとえ「くたばれ高三郎」であろうと、「藪山高三郎」であろうと、「道が荒れている」と聞いて胸疼くような山はここしかない。いよいよ来年には開通できるのだ。

補助金のことを教えて下さったナカオの林さん、スポーツ振興課長に引き合わせて下さった5期の稲葉先輩、そのうえ尾崎主査が倉谷出身で話がツーカーだったうえに、OBや現役の皆も現場に出てくれた。だから「高三郎に道ができる」というのは、それ以前に「人と人との関わりそのものが道を作る」というイメージがあって、そのことにすぐく私は酔えてしまった。同時に小屋酒場の企画もスタートして、こっちは13期の皆さんのリードで着々と整備が進み、快い疲労のあとにおいしいお酒で酔えることにもなった…。三角点を撫でつつ、そう、高三郎の神は本当にいるんだわと私は微笑んでいた。

ガスにおおわれだした。明るいうちに下山しなければ…。慣性の法則も味方して800m付近で現役に追いつき、頂上から1時間半で沢に下り着いた。田村さんの地下足袋は、下りは踏んぱりか効かず不利になるよう。奥名さんはとくに帰宅しただろうし、のんびり先輩を待つ。

この下りてくる途中で「いいかになったなあ。新道もほとんど通れるかになった。あと1回やれば大丈夫や。」と言いながら、私を追い抜いて行った人がいる。前号の梅さんの文章中に出てくる、新道口に小屋がけをしているM氏だった。彼は私達が登り



だした時に、田村さんと挨拶を交わして、「いい天気やな。わしも今日やるわ。」と言っていた。新道を伐開していたのは彼だったのだ。合流した田村先輩が夕食にお誘いすると後でお邪魔するとの返事だった。どういう方なのか、あとのお楽しみ。

BHには辰野さん達が到着しておられ、水が滔々と流れ出ていた。参加人数が決定した時点で、夕食と翌朝食は現役の食客になるとしてあった。せめて竈でご飯を炊くかと試みるも、昨日までの雨で湿気をおびた生木は燃えつかず、結局カセットコンロで炊きあげた。その頃にはM氏が到着。さすが山暮らしのプロでてこずった竈にパッと火をつけてしまい、湯わかしに利用することにした。

M氏は松任は千代野の人で、まだいくつか小屋をかけているらしい。昨年新道を伐開していて帰りに旧道側を回ってみたら、伐開の後があり、それならなおさら新道を仕上げにゃと思っ

ていて今日になったという。10月にもう一度やってそれで大丈夫やと言っていた。大倉山も横谷側から伐開したそうだ。すごい！と思いつつでもどこか得体がしれない。こちらも当たらずさわらずの所で止めているし、M氏も無難な話で応答している。彼があまりに私のことを「見かけたことがある」というので「ナカオの…」と言うと、「ああそれでわかった。本で見とるんや」と言う。本と言われても、それとわかるほど正面を向いているようなのはなかった筈だし…。それに彼が「ナカオのYを知っとる」と言うそのY氏がこれまた例会に2度しか顔を出していないような得体の知れない人で、ますます困惑させられてしまった。彼が大型ライトを灯して帰った後もしばし？？が漂っていた。この倉谷より奥で一人、山暮らしができる人なんて！！！！に？？？

夕食はカレー班と鳥鍋班があった。今日の入山組がやや増えたものの、昨年より一段とこじんまりになった。小屋に収まるには手頃な人数である。自己紹介をしあい、この時黒の上下の人が山崎主将だとわかった。顔を覚えた頃には卒業してしまうが、そうやって否応なしに世代交代してしまうのは、長所でもある。変わらない部分と、変わっていく部分がほどよくかみあって、ワンゲルは今年も42期の新人達を迎えることができた。卒部証書も、確たる資格ももら

える訳ではないのに。目前にいる彼等との間にまず相違点を見つけてしまうことの方が多いけれど、価値感はきっと同質といえるものだと思う。それを共有できたと実感できるのは、同じ世代の仲間に限られてしまうが…。

満点の星で冷え込みもきつい。就寝中何度かカマドウマが跳ね飛んできた。初夏の酒場の後田村さんが遊びにきたカマドウマの足を皆切り取られたそう(!)だから、新参加者？仲間の恨みを晴らしにきた連中なのか？昔、びっしり便所の屋根に貼りついていましたよね。

21日(日)臆面もなく「正調ご飯の歌」を披露してあげた。今日現役達は帰るだけである。

「ではかたづけましょう。」「団装は?」「適当につこんで」の結果、大鍋とコールマン1器が忘れてあった。テン泊なら忘れないだろうけれど。

小屋は静かになった。この小屋の維持を現役にも伝えていけたらと思うが、もう土台が違うのだ。おそらく春の小屋酒場が小屋を開き、秋の小屋酒場が小屋仕舞いを兼ねることになるだろう。その間に現役達が1泊でも2泊でも利用してくれ、テントとは違う良さを体験できたら…その時、小屋を大事に思う世代が育ってくるかもしれない。

辰野さん、吉田さん、松林さんが、トイレ築



造用の立木を切り出しに行った。このためのチェーンソーを大島さんがレンタルしてくれ（OB会計には無料）、辰野さんがボッカされて、昨春鳥越さんが慌てて夜中に買い出しに行って搬入してくれた混合ガソリンを使用する筈が、田村さんが、それはゴミ焼却用に使ってしまったとのことでズルッになった。それでもかろうじて今回の切り出し分は持ちそうとのことだった。すす竹林の奥にチェーンソーがうなり、小枝を落とした生木が引きずりおろされてくる。田村さんはBH登り口の標識立てと、隣人M氏への挨拶（急遽、穂積さんと白山へ向かわれることになったため）に向かわれた。私の方は、小屋仕舞いのつもりで掃除と備品チェックにかかった。そろそろ備品チェックカードのようなものを作って、補給システムを確立していいかも。そして春先にはボートで一括荷揚げとゴミ下ろしを行えば…まだ改善の余地がある。ダム湖の切れ込みは面倒でもあるけれど、ボートでアプローチなんて、他の山では絶対やれないことができてしまうのだ。

「あと15分もってくれたらなあ」でガソリンは尽きた。丁度田村さんも戻ってこられ、昨日見つけて諦めてしまったアケビを、帽子一杯に

収穫していらした。おまけにそれを私の前に捧げて土下座されるものだから、もう笑ってしまい、皆でありがたく頬張った。

酒場の方は参加人数によりまして、私、5人と判った時点で、大衆酒場ではなく、割烹路線でメニューを練っておりました。ですから三つ葉やカボスといった薬味まで用意しまして、鰻の蓮根蒸しや、カニ真蒸のおつゆなどを並べたんです。そう、会津より遠来の大先輩には加賀料理を召し上がっていただかなくては…ハイ。（エッわか家？今日はお多福からチャーシュー麺をとっている筈でございます。）

来春までと、床にシートを敷きつめる。パボナも吊り下げる。小屋の空き缶、空き瓶類を詰めると、来る時なみにザックは重くなった。よく働いた2日間だった。

「今度は？」と言え

「今度は〇〇を」と

応える仲間のいるあたたかさ

…サカバ記念日より…



9 7 小屋作業を終えて

40期 CL 高岩 伸行

今年の小屋作業も、去年の作業を引き継ぎ、高三郎山までの登山道の草薙を行いました。

当日（9月19日 金曜日）は朝から雨降りでコンディションはよくありませんでしたが、とりあえずベルクハイムまではと考え、出発しました。

ダムの駐車場に車を停め、早速歩き始めましたが、5分とたたないうちに崖崩れで道が塞がれている場所にぶつかりました。かなり危険を感じましたが、通るのにあまり苦勞しない程度だったので、素早く通過しました。

ダム沿いの道はいつも歩いていて多少の危険を感じていましたが、今回残念ながらその不安が現実となってしまい、1回生一人が滑落してしまいました。水のある所まで落ちなかったのと、岩にぶつからなかったのが幸いしたのか、見たところ大事に至ってはいなかったのですが、正直ほっとしました。しかし膝を痛めてしまったので、3年生2人を同伴して下山してもらいました。

この1件でだいぶ時間を食ってしまったのと、あいかわらず雨脚が強かったので、今日の作業を中止してベルクハイムで待機することにしました。出発前からベルクハイムは使用できないかもしれないと聞いていましたが、蜂の巣（内

部のものではなく、戸口の真上の屋根からぶら下がっているもの）は刺激しなければ危険ではなさそうだったので、中を掃除して泊まることになりました。虫がうるさかったけれども、それさえ除けば水はしみてこないし、床は平らでとても寝心地が良かったです。

2日目（20日 土曜日）は雨もあがり、山登りには最適の晴れ模様になりました。去年藪がひどく刈り取った区間は、今年は少し雑草が生えている程度で、作業の成果を感じることができました。

今回もまた改めて分かりましたが、草薙鎌は刃が弱く、山道の整備にはかなり難がありました。何本も潰してしまったのはとてももったいなく思いました。やはり鉋や鋸が最も適しているのだと思います。

残念ながら頂上まで終わらすことができませんでしたが、やれるだけのことは出来たので、良かったです。夜は一緒に作業を手伝って下さったOBの方々と食事しお酒を飲み、親睦を深めることもできました。

自分個人としては、高三郎は毎年何度も訪れた所であり、今回が最後になるかもしれないだけに感慨深いものがありました。



補助金のはなし

スポーツ振興課からの補助金のシステム、特に現役の方むけに説明しておきたいです。

各課が来年度の予算を立案するのは秋。年開けから議会が始まり、承認が2月頃。4月から、各課が承認された予算を執行できることになります。

一方ワンゲルの執行学年の交代は4月。4月に年間計画を立てて、「今年は小屋作業をやる」と言っても、そこで意志表示をしたって補助金は下りてこないのです。

遡ること2年前。37期のみなさんにお伺いして、高三郎の登山道補修への補助金を申請しました。もちろん補助金がおりてきたのは翌年の事で、執行学年は交代してしまっていました。世話をしあげたつもりなのか何か歯車が噛み合わない。4年生になったらほとんど部活に顔を出さないとされるにもかかわらず、就職の決まった37期生4人が作業に参加してくれたのは、返事をした代の責任感だったのでしょうか。

そうやって無事補助金の30万円は現役の手に渡りました。部誌BHはOBカンパで賄われ、30万円は丸々残せることになりました。

さてこれで「登山道修復＝ワンゲルならではのアルバイト」が認識してもらえたか？昨年よりは歯車の噛み合わない思いが解消できたか？というところ…これが何となく。

つまり、現役の皆さんにすれば、来春自分がワンゲル部員であるかどうかともわからないのに、

早々と補助金の申請は行われ、自分の懐に入る訳でもないのゾルマだけが前面に出てきてしまう。どうせやるなら、ボランティアではなく、補助金を獲得できるようにというOBの親切心が、流動的立場の現役の思いとは噛み合っていない感じを受けるのです。補助金をもらうなら先回り…それがかえって「干渉」とも受けとめられる…歯痒くもあれば、悲しくもあります。

こうなると悟るしかありません。そうやって先が見えないのが「現役」という立場なのです。現役だけがやれば、ボランティアで終わるしかない登山道修復作業を、同じことをやっても身入のあるものにしてあげられるのがOBの存在なのです。

補助金というものの、報告をきちんとやれば次回からは楽になり、これを重ねればある種の既得権。よほどのドジをやらない限り、問題無しで継続が可能かと思えます。

その意味ではかつてのワンゲル道のようなその年度だけの道作りバイトと違い、重点整備箇所を何年かで一巡と計画していけば、継続して受け取れるといった高三郎様様のおいしい話なのです。

こんなおいしい話をさらにおいしくするのは方法論。新トレ偵察時にちょっと整備の時間を加える。新トレも、鋸を1本しのばせて、刈り払ってくる。秋は土日の2日間として、一日目早立ちで作業し、夜はBHで大宴会をして帰ってくる…それで延べ60人は容易に計上できるかと思えます。

毎年30万円！遭難対策金にもなるし、先立つものがあれば、こんなことをやりたいって夢だって湧くじゃありませんか！

「来年も。もちろん議会を通してからということですが」とのお返事をいただいています。今年よりもっとおいしく、作業をやってみませんか！

(舟田 節子)



9月21日から3連休となっていた私は、小屋酒場後、できれば白山中宮道を下ってみたいと思っていた。田村先輩の

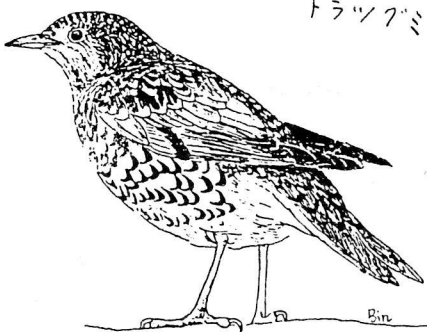
「24日まで暇だなあ」（福井工大にて、先輩が師匠と崇める綾井氏の講演が24日午後にある為）とのお言葉を耳にし、白山行きにお誘いした所、即「行く」とのお返事を頂いた。私はそのつもりでの支度をダムに残してきた車に用意してあったが、田村先輩は先輩でBHの標高が二千mばかり高くなるだけのことであり、あとは食糧だけと昼食の残りご飯にシソの粉をまぶしコップフルに詰め込まれた。

ダムから一路別当出合をめざし、夕方5時半には再び登山靴の身になった。

（编者蛇足…これも、「白山-BHパーワン」と言えそうですね。打っていて気付きました）立派な中飯場のトイレに田村さんが消えてから10分余り。心配になって見に行こうとした時、出ておいでた。すっかり暗くなってきたが、それでも何組かの下山者と擦れ違った。

今晚の宿甚ノ助に着いたと勘違いされた田村さんは、もう少し上に新避難小屋が建て直された事を知り、ガックリと力を落とされたようであった。それでも気を取り直し、甚ノ助小屋までたどり着いた田村さんは、濡れた服を着替え熱いスープを飲んただけで寝てしまわれた。

（ベルクハイムからの帰り、沢で足を滑らせ、下半身を濡らしてしまわれ、かなり体調が悪かったようである。）



トラツグミ

翌朝は千振尾根避難小屋が見えていたが、次第に雲に隠れてしまった。幸い田村さんは体調を回復されたようで、シソご飯とスープの朝食を取られた。

室堂を過ぎ、裏(?)からの剣カ峰、大汝やお花松原に感激しながら順調に進み、2349P付近で昼食。またもやシソご飯とスープの昼食を済ませて、田村さんは「食器をゆすぐ」と称して、梅酒のCCレモン割をゴクリ。「こっちの食器も」ともう一杯ゴクリ。それから30分程でキジ打ち休憩。原因は酒ではなく、食べ過ぎらしい。時折降る雨の中を、ゴマ平避難小屋まで「腹筋」と「肛門括約筋」の微妙なバランスを取りながら歩かれたのだそうだ。

夕食後は、梅酒のCCレモン割を飲みながら、田村さんのいろいろなお話を伺うことができた。湿った1980円のシュラフは寒く、目が覚めてしまったので、敷いていた薄い銀マットを筒状にしてシュラフの中に入れた。初めは暖かくて良かったのだが、汗で蒸れてしまいやがて寒く感じたが、そのまま朝まで寝た。

最終日も時折雨の降る天気だったが、次第に回復に向かう中、順調に中宮温泉へ下りた。

紅葉にはまだ少し早かったが、中宮道に入ってから誰一人として出会わない静かな素敵な道だったし、田村さんのお蔭で心細い思いをしなくてすみ、楽しい山旅であった。

（编者蛇足…田村さんは24日朝お元気な顔を見せて下さいました。

「いやあ、食当たりで吉田君にはたいへんな迷惑をかけてしまった。もうこりごりだと思っているだろうな。謝っておいてくれ。」

食当たりの原因は、あのあやしげな桑の実酒だろうと、私は想像していますけれど…)

金沢
山間部

ニホンザルの生息調査へ



昨年12月に群れによる猿害が確認された大根畑
＝金沢市熊走町

白山自然保護研究会

作物被害の拡大懸念

「タカサブロウ群」の数把握

白山自然保護研究会は今冬から、金沢市犀川ダム奥の高三郎山に生息するニホンザルの本格的な生息調査に乗り出す。昨年暮れに下流域で初めて群れによる農作物被害が確認されるなど猿害の拡大が懸念されており、同研究会は個体数や群れの数、白山地域のサルとの交流関係などを把握し、これまで不明だった「タカサブロウ群」の実態に迫りたいとしている。

100匹以上？予想超える繁殖

高三郎山は金沢市街の南南東二十四キロに位置し、標高一四二一メートル。白山地域では平成七年現在で二十四群、千八十六頭のニホンザルが確認されているが、白山山系につながる高三郎山の調査は手付かずのままだ。

犀川ダム近くの金沢市熊走地区では昨年十二月、二十四匹規模のサルの群れが出没し、大根やカボチャ、カキを食い散らす被害が出た。河内村以北で猿害が確認されたのは初めてであり、白山自然保護研究会は高三郎山のサルが予想を超えて繁殖し、行動範囲を広げているとみて初の生息調査を実施することにした。

現段階では百匹以上いると推定され、夏場には高三郎山の千ヶ峰前後、冬場に山つづみに下

りて生活しているとみられる。数年前には首に発信器をつけた白山地域のカムリA群のオスサルが犀川ダム付近で見つかり、白山のサルが金沢山間部まで足を延ばしていることが裏付けられている。

高三郎山周辺は急しゅんな谷があり、降雪期は立ち入ることが困難なため、研究会では十二月と残雪期に集中的な調査を実施する予定である。

研究会の滝沢均副会長は「流課専門員は二十十年の暖冬が繁殖を加速させた一因と考えられる。今後は医王山の調査も視野に入れ、猿害防止と保護に向けての基礎データを収集したい」と話している。

北の都の思い出

試験（そのⅡ）

0期 田村 昭夫

教養部留年中、法文学部の高島君（3期）の隣席で試験を受けたことがあった。

地学の問題で

「トンボロの意味を述べよ」

と云うのが出たので、私は高島君に教えを乞うた。人の良い彼は私の要望に応じてくれ、机の中から教科書を出して調べてくれていた。

突然、後方から教官が近づき、教科書と答案用紙は彼の手中のものになった。気の毒に高島君は即刻退場となった。

私は胸が痛んだ。彼が退学になったら、それは私の責任である。今年も留年と決まっていながら未練たらしく試験を受けたのは迂闊だった。友人まで巻き添えにしたとなっては…。彼の処分が決まる迄、祈るような気持ちだった。

幸い彼は、訓戒処分で済んだ。

以後私は、絶対にカンニングが出来ないように、自分を規制した。数年後、ようやく専門課程に進めたが、試験の時にはいつも孤立無援の席をとるようにしていた。中川君（6期）が相変わらず崖っ淵にいる私の為に「カンニング特等席」を用意してくれて、感謝しつつ丁寧に断りしていた。

それもうわべのことであったか、結局中川君には、卒業間際に化学工学科目の単位取得の為に大変な御尽力を賜ることになってしまった。北の都の学生生活にようやくピリオドが打てたのは、彼の御蔭なのである。

北の都の思い出

試験（そのⅢ）

昭和37年。大学8年生の私は、夏休み中に教養部の物理、数学、科学の追試を受けて単位を獲得る為に、ワンゲル部屋に泊まり込み、背水の

陣を敷いていた。秋に専門課程に進めなかったら、退学余儀無し。絶体絶命のピンチに立たされていたのである。

そんな私の為に、教養部教務課の川崎課長は、物理、数学、科学の教官達に頼んで追試の手続きをとってくれた。お蔭でめでたく滑り込みセーフとなった訳で、川崎さんには大変恩義を感じている。今どうされているか？お元気で居られれば80歳頃だろうか？

こんな思い出の為に、私はつい最近迄よく試験の夢を見たものである。この時の圧迫感が大脳皮質深く刻まれた証拠であろう。昨年山小屋で、現役部員の一人が夢を見て泣いていたが、ひょっとして彼も試験の悪夢に取りつかれた気の毒な犠牲者だったのかもしれない。

もし学生生活に試験がなかったとしたら、何と素晴らしいことか。ちなみに、旧制の横浜高等工業では三無主義と称し、無試験、無落第、無賞罰を校是としていた。学生達は伸び伸びと学んでいたと云う。

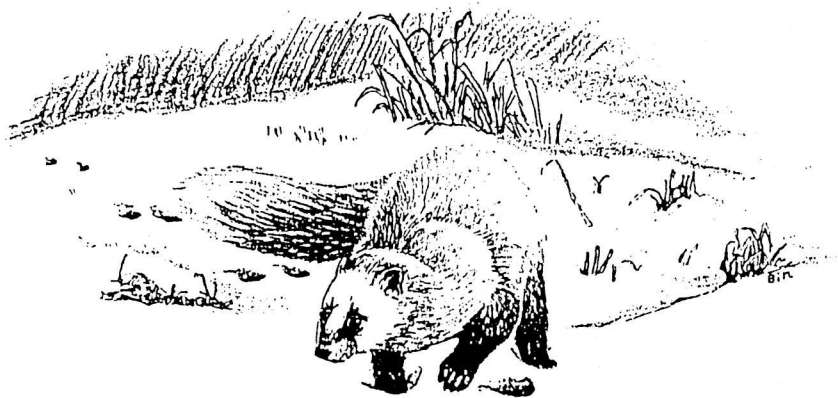
強制された勉強より、自主的学習の方が実りのある結果を生む。大学人に再考を求める。

中高年登山

先日金沢からの帰途、新津から乗った磐越西線の車中で、九州から会津の山々に登りに来た4人のベテラン登山家達に出会った。

69歳を最年長に、62歳が最年少。そこに61歳の私が話に加わったのだから、盛り上がりは御想像いただきたい。彼等は博多の山岳会に所属していて、うち3人は20代から登山を続け、あとの1人が停年になってから加わったと云う。国内の山は無論、海外の山も登っているそうだ。昨年はキリマンジャロへ行ったそうである。

中高年登山が盛んな昨今である。「やまざと」の読者諸君、過ぎ去った学生時代を過去のものとせず、現在に取り戻すことを提言する。



「山は足で登るものではなく、心で登るものだ」と、ある登山家は云った。日常生活や都会生活の為に山から足が遠のいて、つい億劫になっていないか。

そのような方々に云いたい。まず我等の故郷「ベルクハイム」に行ってみよう。そこには忘却した青春が今も息づいている。倉谷川の早瀬、高三郎への尾根道が諸君を迎えてくれる。そして昔の友の笑顔が。

華夷の弁

「世界の中心が自分である」とする思想が中国にある。これを華夷思想と云う。

金沢大学ワンダーフォーゲル部の巣「ベルクハイム」こそを世界革命運動の拠点とすべし。

第一歩は倉谷を桃源郷とすることからである。来年からは木炭の生産が開始されるはずである。サラリーマン稼業にドブプリ漬かった生き方から足を洗い、一緒に理想郷の建設に汗しようではないか。

40年前に、私がワングルの諸君に呼び掛けた言葉は

「自然を通して人間社会の有り方を学ぼう」だったと思う。社会生活を体験し、子育ても終えて、人生の実りの次期を迎えた今、また、新たな呼び掛けをしたい。

物があがり過ぎ、贅沢と便利さに慣れ切った私たちの生活、倫理感など地に落ちた政治・経済。行政、及び教育の制度疲労。社会全体が元気がない世紀末的様相を呈している。

ここで我々は、初心に帰って、動物の一種としての人間の、自然との関わり方を考えてみようではないか。一世紀前の日本人は、自然との共存に叡知を持って努めていた。そんな日本人が、西欧の科学技術を無批判に取り込み、先人達の智恵を無視してしまったツケが、今回ってきている。

「山河への畏敬の念を取り戻すべし」

常用と請負

表題は、私が土木作業員をやっていた時に覚えた言葉である。「常用」とは時間給であり、「請負」とは出来高払いである。

従って、両者間では作業員の働き方がまるで違う。「常用」の時には働いているようにみせかけ、時間稼ぎをやる。「請負」の時には気遣いのようになって仕事をする。優れた土木作業員は、うまくこの両者を演じ分ける。

ホワイトカラーのサラリーマンはさしづめ「常用」であろう。何十年も同じことをやっていれば、堂にいった「常用」作業員になる。

先日、私の従兄弟は53歳で逝った。内科小児科の開業医であったが、彼の生き方はまさに「請負」のそれであった。白骨になって判ったのであるが、骨髄は茶色に変色していた。隠坊の云うには薬を服用していた証拠の由。家族にも知られないように薬を飲みながら、自らの体をむち打ち、多くの患者達に名医と慕われた従兄弟の正体を知り、私は涙を禁じ得なかった。

人の生き方にも「常用」と「請負」がある。あなたはどちらの生き方を選ぶか。

主の十字架を負う者

11月2日夜NHK教育テレビで、3時間を越える小沢征爾指揮「バッハマタイ受難局」を見た。

イエスの役割のトーマス・クアストフに心を打たれた。彼はサリドマイドの犠牲者である。イエスがそうであったように、彼も又、十字架を背負わされている。人間の愚かさが被害をひき起こし、何の罪もない人を犠牲にしている。彼の歌うイエスの言葉は、彼自身の言葉でもあるに違いない。

私は朝方まで眠れなかった。深夜、私は自分の体がイエスの墓となり、私の体の中でイエスの甦りを心から祈った。

目覚めた時は「文化の日」の晴々とした朝だった。グラスのワインを一気に飲み干すと、体中に力が湧いてきて、今年末に歌う「第9」の歌詞が飛び出した。

Freudig, wie ein Held zum Siegen
Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder-überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen-
Freude, schöner Götterfunken, Götterfunken.

スキーを教えてください

10年程前、かの有名なスキーヤー、トニー・ザイラーと、磐梯山麓のスキー場で滑ったことがある。

彼に会った時、付け焼刃のドイツ語で私は云った。

”Könnten Sie mir bitte das Skifahren
heibringen”

ザイラー氏は怪訝な顔をしている。もう一度云ってみたがおなじ。3度目は一語一語ゆっくりと発音した、しばらく考えていたザイラー氏は、ボンと膝を叩いて“beibringen”と答えてくれた。何のことはない。beibringen (教えるの意)をheibringen (?)と覚えてしまっていたのだ。

氏は私より1歳年上だが、二人は意気投合してゲレンデを滑りまくった。彼は私の古色蒼然とした竹ストックとスキーにいたく感心していた。

スキーが終わって、私が持参した日本酒を彼に勧めたが、

「私はスポーツマンだから酒は飲まない。」と云う。さすがオリンピックの三冠王は違うと今度は私が感心した。酒は彼と同行してきた三人のオーストリア人に飲まれてしまった。

いつの日か、彼の棲むキッツビュールのスキー場で、一緒に滑りたいものだ。

人間如何に死すべきか

学生の頃、私はもし宇宙の真理を発見したら、何時死んでも良いと思った。神の「光あれ!」と云う命令で出来たビッグバン宇宙の仕組みを知った今では、もう自分はどうなっても良いと思っている。

今日もイエスの血(赤ワイン)を飲み、エンヤのオリノコフローを聞きながら、晩秋の日差しを浴びている。残された日々を如何に生き、如何に演出するかを思う今日この頃である。

古代ギリシャのある哲人は、年とって石に躓いて転んだ時「大地よ、お前が呼ぶならすぐに行くよ」と毒薬を飲んで死んだという。また、ガンジス川の流れを見つめつつ、死を待っている人々が居ることも知っている。四国のお遍路をしながら人生の終焉を迎える方法もある。

死へのBGMにはモーツァルトのレクイエムがいい。贅沢で羨ましい死に方は「腹上死」であろう。これは望んでも成就できるとは限らない。理想的な死は、他人の為に命を捨てることである。これは価値ある死である。

私が最も嫌う最期は、病院で鼻にチューブを突っ込まれて半殺しにされることと、車に轢き殺されることだ。俺を轢き殺した奴には化けて出てやる。

逆駆出山門

禅の公案である。字面は、後ろ向きになって山門から駆け出すと云うことであるが、皆さんは如何に解くか。私は「山門」を大学の校門と考える。

私は「皆が行くなる大学という所に我も行かむとする也」と入った「学問の府」には見事に裏切られた。高校時代の延長のような講義。

唯一の救いは哲学という講義があったことである。鬼頭教授のテカルトの名句「我思う 故に我あり (Cogito ergo sum)」について述べよという一問だけの試験には、これこそ大学と思つたものだ。

後がなくなって、仕方なしに進んだ専門課程は、詰め込み授業。教授は二言目には「会社」を出す。何とか卒業して就職したら、今度は仕事の為のお勉強。

学問に場所を求めたことが間違いだったと悟つたのは、最近である。学問は門のある場所で学べない。自らに問いを發し、答えを探す。学問の府は自分自身である。大学は、学問とは無縁な所で、知識と手法の大店舗（スーパーマーケット）に過ぎない。

こんな場所からは逃げ出すに限る。しかし、自らに問い且つ考えたことを世間に問い掛ける場所として、大学を利用するのも便法ではある。

仕事と遊び

仕事と遊びの心は同一である。違うのは、仕事には収入が伴い、遊びには支出が伴う。

昔、高橋義孝と云う独文学者が「仕事とは神聖なる遊びである」と云った。神聖かどうかは知らぬが、仕事は遊びであることには間違いない。年金生活者になつてつくづくそう思う。

会社で仕事をやっている時は本当に楽しかった。困難な仕事ほど面白かった。

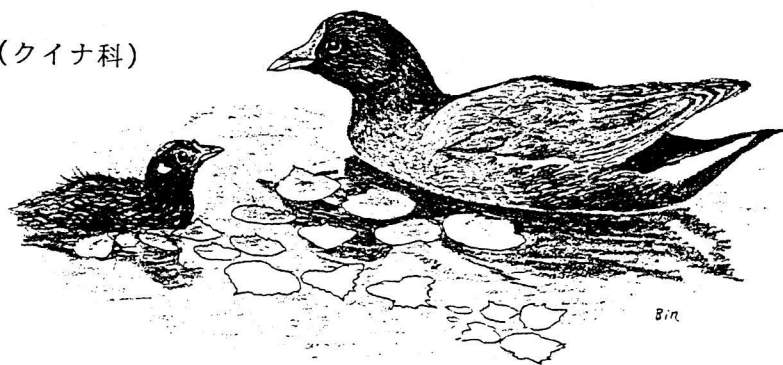
独立してやろうとした仕事には注文がとれず、止むなく廃業し、機械設備をそっくり山形大学工学部に寄付したが、仕事をやりたい気持ちは今も変わらない。

遊びも又楽しい。仕事と遊びの共通点は、どちらも創意工夫が必要だからだと思う。

今は年金がもらえるから生活に心配はないが、毎日が日曜日とは、かくも退屈なものとは思わなかった。だからこんな駄文を書いて暇つぶしをやっている。

一足先に停年を迎えた者は、これから停年を迎える諸君に云っておかねばなるまい。それは生涯を貫く仕事を持つことである。それは一人一人異なつて当然である。好きで、楽しく、社会に貢献出来るのが仕事であり、報酬は充足感である。遊びには社会への貢献がない。従つて虚しさだけが残る。

バン（クイナ科）



ドイツの作家ヘルマン・ヘッセは、ある日本人の読者への手紙に

「大きな計画を立ててはいけません (Nicht groß programm machen!)」

と書いている。

これを私は私自身への警告と受け取った。

「日本を改革する」だの、「世直しをするのは俺だ」等、最近の私の言動には、身の程知らずのものが多かった様に思う。教祖ぶった言い方を皆さんにしていたことを、深く反省する。申し訳ありませんでした。

高望みせず、自分の出来る範囲で一步步、理想の世を築くことが、私の生き方なのだと思う。日本の初代大統領になるのだなどと、たわけたことを云っていた自分が恥ずかしい。皆さんも私のような大言壮語は決して云わないでもらいたい。「云うは易く、行うは難し」。

だからといって、理想を無くして現実に流されることを良しとするのでは断じてない。自分の立場をしっかりと見定め、身近なことから改革していった欲しい。

炭酸ガスを排出しているのは自分である、自然を破壊しているのも自分である、という反省をもって欲しいのである。人々の意識が変わった時に初めて世界は変わる。

千ゴモズ



北の都の思い出 落第生

教養部8年生の私は、城内の植物園に寝転んでいた。空から白いものが落ちてきて、私の眼鏡が見えなくなった。正体はカラスの糞だった。カラスまで落第生の私を馬鹿にしている様で情けなかった。

井上靖の詩「流星」の中の一節

「私はいつまでも砂丘の上に横たはっていた。

自分こそ、やがて落ちてくるその星を
己か額に受け止める、

地上におけるただ一人の人間であることを、
私はいささかも疑はなかった。…」

と似た様で似ていない、あまりにの落差に一人涙する私だった。

次の日、郷里から父が出てきた。親父は大学を辞めて、家業を手伝えと云う。私が

「もう少し長い目で見てくれ」

と云ったら、カミナリが落ちた。

「これ以上長い目とは、どんな目を云うのだ。バカモノ！」と。

その夜は当時金沢駅前にあった「日の出旅館」で、一晩中親父の説教を喰った。

翌日、

「もしお前が退学することになったとしても、俺はお前が無能な男とはどうしても思えない」と云い残して、親父は帰っていった。私は信頼されている息子の幸せを感じながら、後ろ姿を見送った。

行って受け、帰って受けたカスタムショック

21期生 大野 直子

女子高生のスカートが異様に短い。制服なんだからそこまで短くしなくともいいんじゃないの？ 第一、階段を昇る時、後ろの人は目のやり場に困っちゃうでしょ。しかもニョッキリ伸びた足にはみんな判で捺したようにダボダボの靴下を履いている。極太の毛糸で編んだ厚手のソックスは遠きワングル時代、先輩諸氏にチャムランへ連れて行って買って買ったものではないか…。はたまた、くるぶしからズリ落ちそうで落ちないその靴下の形相は、新雪をかき分けかき分けピークを目ざした冬山装備のスパッツにどことなく似ているではないか…。今から雪山に登る、いや、金沢城跡探検のためブッシュこぎに行くからね…というのなら、解る。でも春もうら街中を歩く女子高生がである。しかもみんな同じ、おんなじ格好をしているのである。

主人の仕事の関係でメキシコで暮らすこと3年。3年振りに日本という国を見て、なんかへん…絶対へん！ってということがいっぱいあったのだ。

カルチャーショックと言うほど大袈裟なものではないので、カスタム（習慣）ショックとでも言えればいいのか…。時間が経てばいろんなことが変わるし、所変われば習慣変わるでそれは当然のことだが、「アレアレ？」という感覚は、ほとんど金沢を出たことのない私にとって新鮮なストレートパンチでもあった。つまり視点を変えることができた貴重な体験となったのである。

「Oh, no! セニョーラ（奥様） そんな重い物を持ちちゃ!」。同じマンションの住人が警備の人がサツと現れ、私の手から荷物を素早く持ち去り、部屋の入口までジェントルマンよろしく満面笑顔で運んでくれる。スペイン語だからよくは解らないけれど、そう言っているのだと思う。

メキシコ人はとっても愛想がいい。それにレディーファーストの国。マンションに住む人は通常メイドさんを雇っているし、奥様はスーパーへ買い物に行かない。行ったとしてもメイドさんや運転手さんが荷物を召し抱え、ふんぞり返って歩くだけ。私の場合、掃除を頼んでいたお手伝いさんはいたものの、和食店のわが家では、ご飯づくりや買い物は一切自分でやっていた。

ご存じメキシコは情勢不安の国、スーパーでピストル

強盗に会うことも決してまれではないため、回数を減らすためにまとめ買いをすることが多かった。タクシーはびっくりするくらい安いから使えばいいのだが、車という密室で二人きりになるのが怖くて、自ずとたくさんのスーパーの袋をぶら下げて歩くことになる。

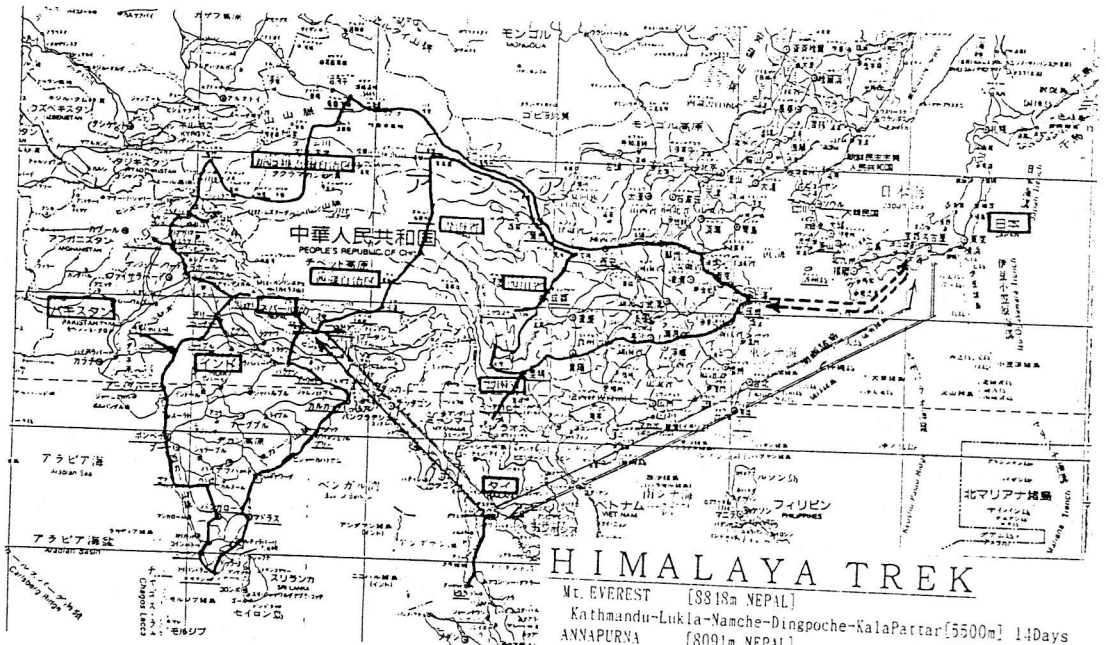
その結果起こるのが、このセニョーラ事件。向こうも親切心なのだから、グラシアス（ありがとう）で行為に甘んじればいいのだが、そうはいかない。ドアの前まで来たらポケットからお金（コイン）を出し、スッと手渡さなければならない。ところがバッグから財布をモゾモゾ探し出し、「5ペソじゃ少ないかしら…、重かったから10ペソぐらいかしら…」という具合で、決して外人がやるようにスマートにはいかない。そう、メキシコにはチップの習慣があったのだ。

メキシコで一番頭を悩ませたのはこの「チップ」だった。1億総中流の日本にはその習慣がないばかりか、独立独歩、他人のことは構わない日本人にとってチップは誰もが戸惑う習慣ではないだろうか。お金が欲しいから、じゃない。困っている人を見過ごせないラテンの熱き血がそうさせるのだ。私としても5ペソや10ペソのお金が惜しいわけではないが、「ほっといて！ ボッカで鍛えたこの身体、へっちゃらなんだから自由にさせて。どんな苦境にあっても冷たい視線しかくれなかった日本人が懐かしいー!!」、何度そう思ったことか…。

メキシコ人は道を歩いていて目が合うと、知人他人にかかわらずニコリ笑う。その習慣が良い悪いを問う以前に、日本ではそんな行為は存在しない。なぜって視線を合わせないことが習慣だから。

日本の常識が世界の非常識だったり、メキシコの常識が怒り心頭のこともあったり。わが身においてもまたしかり。いろいろなことを考えさせられたメキシコの3年間、帰ってからの半年間であった。

本当なら、主人が5300メートルのメキシコの山イスタシワトルに登ったことや、アラスカ、アメリカの国立公園を家族で周ったこと等を書くのが誌面にふさわしいのだろうが、戯言（ザレゴト）と思って読み流して下さい。メキシコでショックを受け、日本に帰ってからもショックを受けた、ダブルパンチのカスタムショックの、お話をした。



HIMALAYA TREK

- Mt. EVEREST [8848m NEPAL]
- Kathmandu-Lukla-Namche-Dingpoche-KalaPattar[5500m] 14Days
- ANNAPURNA [8091m NEPAL]
- Pokhara-BaseCamp[4100m]-Tatopani-Yukutinath[3800m] 21Days
- NANDA DEVI [7816m INDIA]
- Rishikesh-LataVillage-LataKharak[3900m] 5Days
- NANGA PARBAT [8126m PAKISTAN]
- Gilgit-Chorit-SouthFaceBaseCamp[3500m] 5Days
- DEOSAI PLATEAU[5000m PAKISTAN]
- Skardu-DeosaiPlateau-BurjiPass[4800m] 5Days
- KARAKORUM K2 [8611m PAKISTAN]
- Skardu-Baltoro-K2 B. C. [5100m]-GondoghorPass[5700m] 15Days

*深井 嘉浩 29期

前略、皆様お元気でしょうか？

私事ながら、先日、8ヶ月のアジア放浪旅行を終えて帰国いたしましたので、遅れ馳せながら、ご報告させていただきます。

(’96年12月-’97年7月 総費用は約70万円)

今回のルートは、タイ-ネパール-インド-パキスタン-中国[シルクロード-上海]の5ヶ国を巡ると共に、エベレスト、K2etc.世界の屋根ヒマラヤの峰々をトレッキングして参りました。

これからどんな職に就くのか、未だ模索中の身ではございますが、アジアの人々から得た”ENERGY”を手土産に、また新しい生活を始めて行きますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。
’97 夏

ps 毎度「やまざと」と「ベルクハイム」送付ありがとうございます。

OVER LAND ASIA

Stage 1 01/MAR /1988-21/JUN /1988

(金沢大学在学中)

神戸港-上海-雲南省-四川省-青海省-

西藏(チベット)-ネパール-バンコク-大阪AP

Stage 2 12/DEC /1996-28/JUL /1997

(今回)

名古屋AP-タイ(ビビ島)-ネパール-インド

-パキスタン-シルクロード-上海-神戸港



ジャマイカのリズムにのって

34期 飯村 雅子

私はこの度、お蔭様で2年間の青年海外協力隊としての任期を無事終え、8月に実家に帰ってることが出来ました。出発の際には温かいお励ましをいただき、本当にありがとうございました。みなさんの応援をいただければこそ、健康で充実した毎日を過ごせたのだと、心から感謝申し上げます。今回「ジャマイカでのことを何か」とお声を掛けていただきました。外国のことは皆さんのほうがよくご存じでしょうし、会報の趣旨から外れてしまうかもしれませんが、私の見た感じたジャマイカを少し御紹介いたします。

2年前の7月、中央アメリカのカリブ海、キューバやハイチ等の島々の南に位置する、秋田県とほぼ同じ面積の常夏の小さな島国ジャマイカに、私は養護の隊員として派遣されました。自分が行くことになるまではどこにあるのかさえも知らなかったのですが、レゲエとブルーマウンテンコーヒの故郷と言えましょう少しイメージが沸くでしょうか。大昔にこの地に住んでいたアラワクインディアンという言葉でザイマカ（木と水の大地）という意味を持つように、緑豊かな美しい国です。1494年にコロンブスに発見されてから様々な歴史を刻み、多彩な文化が融けあった国、今のジャマイカとなったのです。イギリスの植民地から独立したこの国には、現在250万人もの人が生活していますが、その80%近くはアフリカ系黒人で、英語を公用語としています。といっても現地ではパトワという言葉を使っており、言葉では大変苦労しました！

食事は、米、イモ類等を中心に、鶏・牛・山羊肉、魚など、主に砂糖や塩こしょうで味付けられており、様々な南国特有のフルーツが、食卓を彩ってくれました。ただ砂糖と油を非常に多く使うため糖尿病が多く、体格のよい女性がとてもたくさんいたのは考えさせられました。現役時代から重い身体ゆえに？よくバテていた私でさえも、十

分細いじゃないと錯覚してしまうくらいでした。

ジャマイカ人はとてもお洒落です。髪の毛のセットや凝った編み込みに時間もお金もかけ、Tシャツにしっかりとアイロンをかけるほど身だしなみに気を配ります。洋服もカラフルで派手なものを好み、自分好みの物をつくるための布屋さんやドレズメーカーが大はやりです。

住まいはお金持ちとそうでない人との違いが大きく様々ですが、ほとんどどんな家にもグリルという鉄格子のようなものが窓やドアにとりつけられており、カギもいくつも付けて治安に気を配っていました。また風通しをよくするためか、窓や玄関にはすき間があり、アリやくモ、蚊、とかげなどに悩まされたものです。

私の職場マッカム小児発達センターは、政治・経済・文化の中心地、首都のキングストンにあります。職員12名、6か月から7歳の障害児、健常児あわせて60名が通ってきています。この施設はジャマイカで唯一の統合保育通園施設で、健常児と障害を持った子供たちが共に生きる場をと、10年前に今の施設長によって建てられました。NGOで国からの援助がないため、経営的には苦しい状態が続いていますが、紙がない糊がないスプーンがない...と常に教師は嘆きながらも、ないときはあるもので工夫し、節約することを学びながら活動しています。私はここで、

- (1) 障害児の個別指導
- (2) 教師への障害児理解のための勉強・討論会
- (3) センターの移転建設に係わること
- (4) 教育環境の整備
- (5) 学校紹介のための記録

を行ってきました。2年間これらを進めていくに当たって、自分の英語の未熟さを痛感し文化習慣の違いに時にはついていけず、怒ったり泣いたりすることもありました。しかしいま振り返るとうれしかったこと、楽しかったことばかりが思い出されます。その中でも2年間で最高にうれしかった出来事を2つ、紹介したいと思います。

1年間私が指導してきた自閉症の5歳の男の子K君が、突然口を切ったかのように話しはじめた

のです。最初の半年は「Water」をやっとただ一言使うのみで、他には何一つしゃべらず、あの手この手を使っての私の日々の挑戦が、続いていたのですが、今では身の回りのもの、自分の体の部分の名称について興味を示し、指さししながら呼称できるようになりました。ものに言葉があること、人と意思を通わせることの喜びを知ったようでした。親も職員も「言葉のでなかったK君が。」と大喜びで、私も個人差はあっても子供たちの発達の歩みを応援していける、この仕事をしていて本当に良かったと改めて思いました。そして日本でもジャマイカでも、言葉は違ってもうれしい気持ちは共有できることを実感しました。

75万人もの人口を抱えるキングストンは、治安においては世界各国でも有名な大変危険と言われる街で、毎日事件は絶えず、貧富の差がこの国の大きな問題ともなっているようです。そのため比較的安全な地域にあった職場さえも、私がいるあいだに5回以上も泥棒に入られ、その度にドアやグリルさえも壊され雨漏りなど老朽化も目立ってきました。学費の値上げをしたり、毎月1回鶏肉と揚げパンの入った手作りのお弁当を販売したり、個人や企業に資金援助、募金などをお願いして、資金を集めながら新しい場所に移転するため工事を進めていました。しかし工事は遅々として進まず、障害児のことを真に考えたセンターでありながら、資金の不足から、そのためのセラピールームにまでとても手が回らない状況でした。この上は日本のみなさんに何とか助けてもらえないだろうかとの所長さんのお言葉に思い余って、小さなハートプロジェクトの申請をしたところ、地元石川県を中心に支援の輪が広がっているとのうれしい報告をいただくことが出来ました。小学生からお年寄りの方までの、みなさんの温かいお心のこもった募金のお蔭で、建物は無事完成し、ジャマイカのみんなの喜びいっぱいの最高の笑顔を見ることができて、私にとってもこれ以上の最高の幸せはありません。

思えばもしワングルにご縁がなかったら、私は協力隊で海外に行くことはなっていなかったか

もしれません。ワングルで山に自然に、人のあたたかさに触れたことがきっかけとなり、ヒマラヤの山々とそこで生活する人々に会いに行きたくなったのが、大学を卒業する春でした。そこで貧しいながら輝く目で生きている人たちに会い、お客さんではない立場で何かがしたいと思ったのが始まりです。残念ながらネパールではなかったけれど、ブルーマウンテンというコーヒーの山(約2500M)に登れる島国、ジャマイカが第二の故郷になったのです。

この2年間、協力隊員として少しでも現地の人達のお役に立ちたいと思って、活動してきた私でしたが、たいへん陽気で世話好きな彼らに助けてもらったこと、教えられたことのほうが、多かったように思います。この貴重な経験を、単なる良い思い出で終わってしまうのではなく、自分にとってそしてジャマイカにとっても、これからも形を変えながらもずっとかかわり合っていけるもの同士でいたいと、心から思っています。

2年振りに帰国となり、帰路途中に2年分の山への欲求が爆発してアフリカのキリマンジャロへ登ってきました。同じくコーヒーの山ですが、登り慣れたブルマンの2倍以上の高度に、体力の衰えを痛感させられました。

現在はお礼行脚に小中学校を回るなど、活動の残務整理をしていますが、社会復帰に向けてそろそろ動きだしははじめなければならないと思う今日この頃です。2年前まではまだ大丈夫と定職のない私を安心させてくれていた、同期やその前後のワングルの仲間たちも気がつけばしっかり職を持ち、何人かは幸せな家庭まで持ち私を焦らせてくれます。とはいえ、お互い何年もあってもなくても、久しぶりの手紙や電話でそのブランクを埋められる変わらないワングルの仲間たちに、安心感を覚えるのはなぜでしょう。たくさんの人と大自然の恵みに生かされていることを、改めてうれしく思います。

OB会を運営してくださっている皆様のご苦勞に心から感謝するとともに、私たちの心の泉ともなる本会の発展を心から祈っているものです。

夏合宿感想

南アルプス南下パーティー

- 掛布 あっという間の夏合宿だったけど、やっぱりリーダーは大変だった。
前川 ケガをしてみんなに迷惑をかけてしまった。
得田 縦走がほとんどできず残念だったけど、それだけに最初の方の日の山は格別でした。
長谷川 ヒンヤリとした針葉樹の林が幻想的でした。
森田 完全征服したかった。来年こそは・・・
(スイカが甲斐駒のピークで食べられたのが唯一の救いであった)
岩崎 北岳に登れなかったのは残念だったけど、甲斐駒は本当に良かったです。もっと頂上で遊びたかった。

南アルプス北上パーティー

- 中野 途中で下山することになってしまったけど、とても楽しかった。
山崎 最後に良い経験をさせてもらいました。
河村 いろいろ疲れましたが、でも楽しかったです。来年は完全征服したい。
田村 景色が素晴らしく、良かった。
谷本 山から富士山を眺めることができて良かった。
久保寺 農鳥小屋では大変でした。腰痛に苦労しましたが、体変良い経験になりました。今度は全部征服したいです。
笹田 途中下山になったのは残念だったが、景色の良い山々を見られて楽しかった。
津田 今回はケガの状態が思わしくなかったの、皆には迷惑をかけたと思います。

八ヶ岳パーティー

- 小川 下山したのは残念だが、蓼科山は晴れていて、八ヶ岳を一望できてとてもよかった。
高岩 蓼科山はきれいだった。
市山 良かったです。
佐藤 いろんな意味で厳しい山行でした。
青木 頭が痛く、体は動かなくて、みんなに迷惑かけました。
矢内 途中で下山したのが残念だった。

北アルプスパーティー

- 上田 薬師の頂上はとても寒かった。
村井 またもや途中下山。いろいろあったけど、良い夏合宿でした。
竹内 今考えるとリーダーの判断は正しく、勇気があったと思う。
林 自然の厳しさというものが良く分かった。
川俣 雨が多くて悲しかった。
志賀 テントの中につねに水がたまっていて、体がじめじめしてすごく気持ち悪かった。

行事報告

四万十川PW 8/20~24

L長谷川 SL上田 金吉 老田 中野 河村 佐藤

中央アルプスワンデイハイク 9/9~12

小西 上田 小川 得田

槍・奥穂高PW 9/4~6

L田村 SL金吉 西馬 吉原 市山

越後三山PW 10/2~5

L岩倉 SL小西 老田 川本 林

ワンデイハイク赤兎山 11/1~2

L小西 SL林 老田 川本 掛布 長谷川

冬合宿は経ヶ岳に決まりました。

CL中野、CSLは上田です。



ムササビ

編集後記

10月中旬、金沢では初めての地図展が名鉄デパートで開催されました。新建設大臣の視察に合わせ、国土地理院地図部長（前号にもご登場いただいた11期長岡先輩のこと）も来況。

余色立体地図のおねだり（この話はまた別の機会に）がらみで、4半世紀ぶりのデイト（?）。体験パソコンを1台占有して、白山の見える地域や、白山からの展望（例えば御前峰上空2kmなら富士山が見える）図他いろいろと表示していただきました。「白山眺望登山」のテーマで登攀調査に参加していた身には、意外な所からも見えていたり、それが鮮やかに表示されていくことに、ハアッ！。田舎者丸出して、さすが文明の利器と感激してしまいました。

あれから鷺走ヶ岳に登ってくる機会がありました。登って行く時の落葉の匂い、モズの囀り。爽やかな風の向こうに、きらめき輝く白山がありました。雲とみまごう雪煙も時々舞い上がっていました。

その2週間後も大門、赤摩木古山に登ってきました。すっかり葉を落とし明るくなった林からは、早々と犀奥の山々が垣間見え、後ろの猿ヶ山が刻々と姿を変えていくのも見ものでした。谷筋に新雪のなごりを残し、ぐっと名山ばく見える大笠に及。境川ダム湖からのフカバラの尾根を目でたどりながら、飲み干す格別の味のビール。

バーチャルリアリティの限界をはっきりと知りました。それはパソコンをまだもののできないこと―「できない」ということに今も負けん気がウズウズしてしまう私にとって、心安らく再確認でもありました。



OB会報「やまざと」 '97冬号

発行日	平成9年12月	金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会
発行者	大島 良治	事務局 金沢市橋場町10-49
編集責任者	舟田 節子	☎076-222-9288 舟田
印刷	プリントショップ多田（名倉 均 nagura @wnk.njk.co.jp）	